The Landscapes of the Closed Mining Sites in Hokunku, Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/961

金沢大学文学部論集　史学・考古学・地理学篇　第17号
1997年　1—46頁

加越鉱山跡地の風景論

川　﨑　　茂

まえがき

今まで二度にわたって，全国各地の「鉱山跡地」に関する拙稿を本誌に掲載してきたが[1]，本稿もその続編である。いうまでもなく，鉱山集落は鉱山で発達した集落であるから，閉山すれば集落が衰退，消滅していくのは生態学的にも自明の理であろう。一見して単純と思われるこの論理の中に，あえて筆者はネイティブとフォーリンの空間組織を持ち出し，それらの「場所」の風景にこだわり続けてきた。それは「鉱山跡地」という「場所」の風景が，「場所イメージ」としてのその空間認識に重要な意味をもつと考えたからである。

1996(平成8)年8月，北陸最後の夏休みとなり，大学院生のころから気になっていた「越中七かね山」の跡地踏査を，慌てて思い立った。しかし，夏の草木で埋まる山深い越中の山野は全く筆者を寄せつけなかった。機動力に欠ける筆者にとって，交通不便な環境は筆舌に尽くしがたく，短期間での踏査は到底不可能であった。しかし，「越中七かね山」において，近世後期，鉱山の衰退にともない一般農山村としての「村立」がみられたという，その「場所」への関心は一層高まった。加賀の鉱山地も加え，せめて筆者のメモの一部でも本誌に書き記しておきたいと思い，かかる貧弱な内容のものを草した。大方の寛恕と教示を乞う次第である。

Ⅰ.「越中七かね山」への関心

〈飛騨神岡調査〉　1957(昭和32)年の8月，米倉二郎・谷岡武雄の両先生を中心とした，越中条里の共同調査に参加した。その帰路，国鉄高山線の猪谷駅で一行と別れ，独り三井の鉱山専用軌道で飛騨高原郷の神岡に入った。当時，筆者は広島大の大学院生(博)で鉱山集落を研究テーマとしていたので，神岡鉱山地を訪ねるのがその目的であった。結局，幾日か神岡に滞在して，東茂住の清水武茂氏所蔵文書などを集中的に調査することとなった。この調査結果は，「鉱山集落における共同体的構成とその形成過程—飛騨国神岡鉱山の調査から—」と題して，1958(昭和33)年『地方史研究』に報告した[2]。さらに1958年の夏も長期神岡に滞在し，神岡町役場所蔵資料や，鹿間の水上浩一氏保存「村たんす」をはじめ，江戸・明治期の鉱山地関係資料の調査に奔走した。その成果の一部は，「飛騨神岡鉱山の近代化と地域の対応」と題する論稿にまとめ，1960(昭和35)年『人文地理』に発表した[3]。

この調査当時，神岡鉱山の主要鉱区は栃洞と茂住であったが，江戸初期には，栃洞鉱区に和佐保銀山が，また茂住鉱区には茂住銀山が盛山していた。しかし，史料的な関係から1694(元禄7)年の検地水帳をベースに，その後の集落構成の動態的過程を検討せざるを得なかった。そこでまず着目したのが，「元禄七

甲戌年九月　飛驒国吉城郡高原郷茂住村畑屋鋪御検地水帳」(神岡町役場所蔵)と，「元祿七甲戌年十月　飛驒国吉城郡高原郷和佐保村田畑屋鋪御検地水帳」(和佐保・神明神社所蔵)であった。

ところで，茂住村の元祿水帳を検討してみると，高原川右岸段丘面の東茂住(第4図・写真1)には，肩書きに「金山師」とある名請人の屋敷請数85と4ヶ寺ほかなどがみられ，文字通り「茂住銀山」の集落構成を示していた。なお，ここでとくに指摘したいのは，元祿水帳の金山師屋敷に記された屋号名に，「越中七かね山」の金銀山名をとったと思われるものが散見されたことである。すなわち，茂住の場合，「吉野屋」が6，「亀谷屋」が4，さらに「松倉屋」が2などとみられた。さらに和佐保の元祿水帳の場合にも，61の屋敷請金山師の名をみたが，それらの屋敷に冠した屋号名の中にも，「吉野屋」3，「長棟屋」3，「亀谷屋」1などが散見された。このように「越中七かね山」の松倉・亀谷・吉野の金銀山や長棟鉛山の名が屋号として元祿水帳の金山師屋敷にみられたことは，飛越国境地域における金山師の動きの一面を物語るものとしてとくに興味を覚えた。かくして，神岡調査当時，金沢藩の「越中七かね山」についても若干の関心を抱いたが，現地調査を越中に拡大するまでに至らなかった。

〈「越中七かね山」〉　16世紀後半から17世紀前半にかけてみられた全国的な貴金属鉱山隆盛期において，越中から飛驒にかけても多くの金銀山が開発され，短期間ながら盛山をみた。「越中七かね山」中の諸金銀山や飛驒の和佐保・茂住の両銀山は，その代表的なものであった。なお「越中七かね山」とは，例えば『越中鉱山雑誌』(全五巻)[4]の巻一に1811(文化8)年の「由来書上申帳」を掲げる七つの「かね山」，すなわち長棟(ながと)山・虎谷山・河原波山・下(げ)田(だ)山・亀谷(かめがい)山・吉野山・松倉山のことであった[5]。これら「七かね山」はすべて越中国新川(にいかわ)郡に分布したが，鉛山の長棟山を除けば他は金銀山であった。いま亀谷山肝煎の徳右衛門が1811(文化8)年に金沢藩に提出した，前記の「由来書上申帳」をみると，まず「慶長元年加ね山地ニ被仰付」などとあり，さらに「寛永年中之頃迄ハ，大繁昌仕候由承リ伝申候」などと17世紀前半の亀谷山繁栄の伝承を書き上げている。また松倉山についても，前記「由来書上申帳」には「慶長年中之頃加ね山盛申時分，御運上銀一ヶ月判金間歩一口ゟ三百枚・五百枚宛，上申間歩も御座候」などと書き記し，慶長期ごろの盛山の様相を伝えている。

筆者はかかる江戸初頭の盛山伝承より，江戸後期の「かね山」の衰退・変容に関する記述について，さきの1811(文化8)年「由来書上申帳」ではとくに関心をもった。例えば亀谷山の前記「由来書上申帳」をみると，「元祿之頃ヨリ山師段々困窮仕，外稼無御座ニ付，山之尾先等間歩所江相障不申場所ニ而，焼畠等少々宛仕候處，小見村百姓ヨリ彼是申立，段々詮義之上，双方和順」などとある。すなわち，鉱山稼ぎの衰微にともない山師による焼畠耕作などが増大し，隣接する新川郡小見(おみ)村百姓との間に論所が発生した。本来は無高制の「かね山」であるが，結局，小見村の仮領の名目で，亀谷山は1744(延享元)年の手上高を加えて都合11石の草高を所持する隣領付村となった。しかも上記「由来書上申帳」は，「当時山師稼方外ニ可仕様も無御座故，亀谷山之内ニ而，鍬から(柄)或ハ鞍木・足駄羽(歯)等品々仕，売出シ渡世取続来リ申候」などとあり，隣領付村へと一般農山村化の変容を示す，1811(文化8)年ごろ

の渡世状況を記している。

小葉田淳博士はいちはやく1951(昭和26)年に『長棟鉱山史の研究』[6]を公刊したが，その中で「かね山の領付村，長棟村の成立」の項を立て前述の様相について言及している。次いで同博士は1953(昭和28)年に亀谷銀山に関する論稿を『文化史学』に発表し，その中でも「かね山の転質亀谷村の成立」について論述している[7]。さらに1955(昭和30)年には小葉田博士の松倉金山に関する論説が『越中史壇』に掲載されたが，この中でも「かね山」の「農山村への転質」の様相について興味深い記述がみられる[8]。なお松倉金山については，1958(昭和33)年に地元の広田寿三郎氏が「鉱山村の盛衰」と題して『越中史壇』特集で取り上げた[9]。これらの論稿は筆者の神岡調査のころ大変な刺激であった。とくに当時，魚津西部中学校教諭であった前記広田氏が，明治後の松倉村の廃村過程や廃村跡地について記述している内容は，そのフィールドへの筆者の関心を一層高めた。

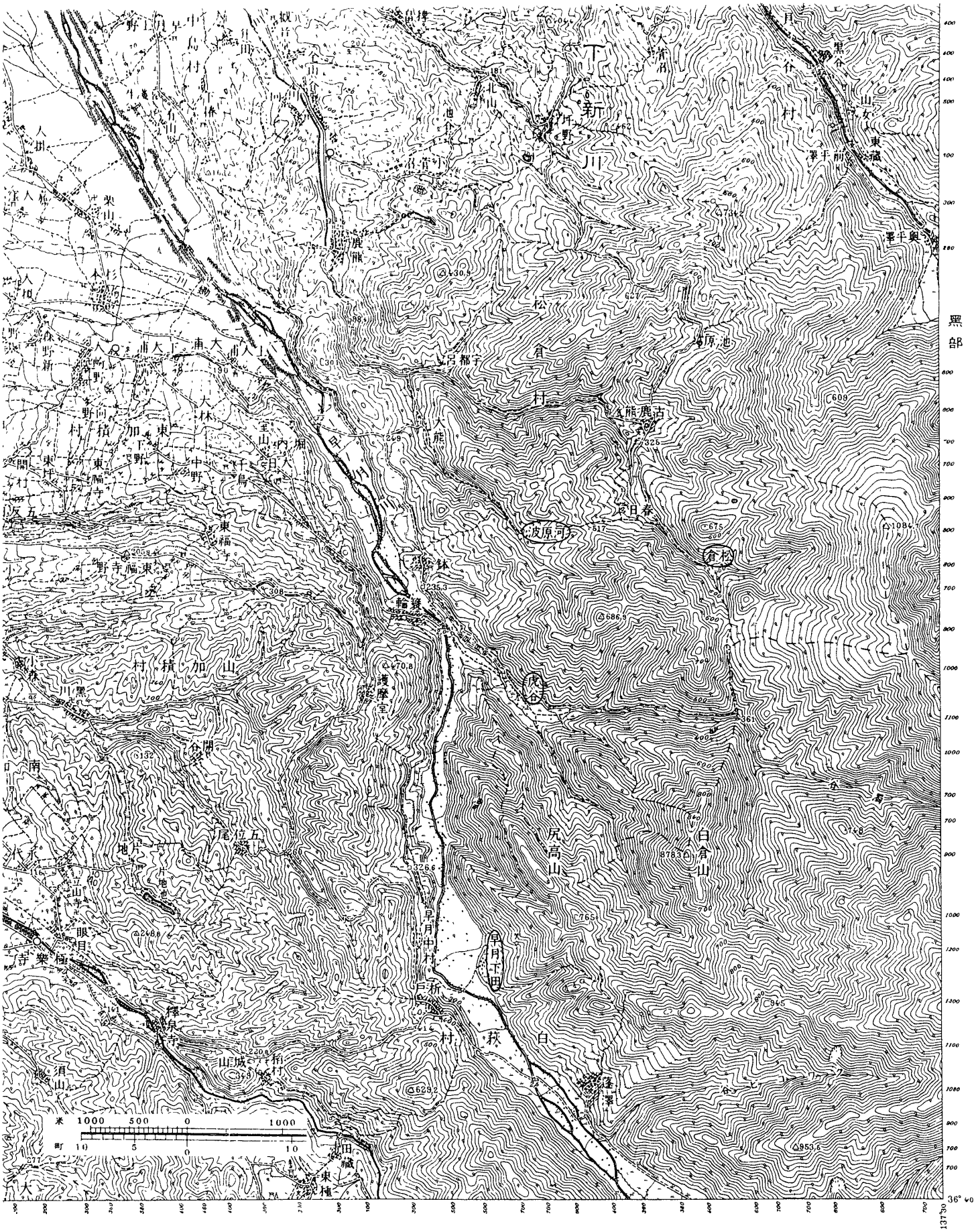
しかし筆者の怠惰から，長い歳月，「越中七かね山」の跡地を訪ねることもなかった。魚津市の前述広田寿三郎氏をはじめて訪ねたのも，氏の前記論説を読んでから38年近くが過ぎた，1996年の夏終わりのころであった。

Ⅱ．魚津・角川上流の「かね山」と廃村

ところで「越中七かね山」関係の集落のうち，1996年8月現在，松倉・河原波・下田・長棟の4集落はすでに廃村となっており，地図から姿を消している。いまだ存続している亀谷・吉野・虎谷の集落にしても，1996年8月1日現在，亀谷の48世帯・人口173を除けば，吉野が12世帯・人口39，虎谷が9世帯・人口13といった程度の集落規模である。ちなみに，1911(明治44)年測図の5万分の1「魚津」図幅(第1図)には松倉・河原波・虎谷・早月下田(下田)，また同「五百石」図幅(第5図)には亀谷，さらに1912(大正元)年測図の5万分の1「白木峰」図幅(第6図)に吉野，同「鹿間」図幅(第4図)には長棟の各集落が認められ，このように明治末当時には「七かね山」のすべての集落がまだ存在していた。

〈「松倉山」〉 明治末期，角川源流域の松倉と河原波，さらに早月川水系の虎谷は，下新川郡松倉村(現魚津市)の大字，すなわち「大字松倉村」・「大字河原波村」・「大字虎谷村」をそれぞれ形成していた(第1図)。虎谷と同じ早月川水系の下田，すなわち1911年地形図に「早月下田」とある集落は，明治末当時，中新川郡白萩村(現上市町)の「大字早月下田村」であった。なお「早月下田村」の大字名は，昭和初には「下田」に改称されている。ともあれ明治末当時，下新川郡松倉村に属する「松倉村」・「河原波村」・「虎谷村」の3つの大字は，魚津市街から角川源流約16kmに位置した標高686.9mの峰の山麓三方にそれぞれ分布していた(第1図)。明治末当時，松倉村の村役場は角川中流の「金山谷村」の大字にあったが(第1図)，この金山谷の地名は角川の砂金堆積に由来し，上流の松倉金山などの開発の端緒になった谷筋を金山谷と汎称したという。

1811(文化8)年8月に松倉山肝煎の清次郎が金沢藩に提出した前記「松倉山由来書上申帳」をみると，慶長年中の「加ね山盛之時分」には誇張的に「家数千軒余御座候」とあり，「松倉在所ゟ下ノ方入口ニ御門柵有之」などと記して，松倉鉱山町盛時の様相を伝えている。しかし，「加ね山」の衰退とともに山師などが退転し，文化期ころには「唯今家数う(空)つろ小屋共十五軒御座候」の状態であったという。なお，



第１図　1911(明治44)年測図の越中松倉村周辺地形図

(陸地測量部５万分の１「魚津」図幅，1918年印刷)

稼ぎを失った山師たちのなかには「焼畠」耕作などに乗り出すものがあり，隣村百姓たちとの間に紛議をかもすに至り，すでに享保年間のころには村高を定めることの談合が十村役との間にもたれていた。しかし「加ね山」は「往古5無高所ニ罷在候所」にして，新開高は困難であるとの理由から，「隣村之仮領」とする方法が申し渡された。その結果，「六石三斗鉢村領之内」，「(一石)五斗古鹿熊村領之内」のごとく，鉢村と古鹿熊村2村の仮領として許可された。その後，1832(天保3)年に至って，隣村協議の上，鉢村・古鹿熊村の仮領分を合わせた7石8斗の村高をもって，松倉村一村の村立が認められた。小葉田博士は金沢市立図書館所蔵の天保3年「新川郡布施組松倉村領分間絵図」にいちはやく着目したが，この絵図には人家が喜右衛門ほか11軒，金山小屋1軒，春日社一宇，合わせて13軒の家数がみられた[10]。なお，「加ね山」衰退後の残存山師たちの生活状況の一端について，前記1811(文化8)年「松倉山由来書上申帳」には，「当時山師稼方春雪消次第葛粉仕，或ハ青菜・独活・せんまい等，魚津町等江売ニ罷越，其日立ニ仕罷在申候。又ハ折々炭焼仕売出申候。併加ね山御用木・矢留木御林山江ハ聊相障り不申候。御用立不申小枝之分炭薪ニ仕，渡世相続来り申候。然処，近年坊主山水抜普請相願，御聞届之上普請相始候処，少々道草加禰取上，灰吹金御買上ニ相成候得共，又々鉱立悪敷相成，折々普請も仕得候共，取上り無御座難渋仕罷在申候。」などと記している。

以上のように享保期ころにはすでに村高を出願するなど，無高無反別の「加ね山」から，年貢・小物成など負担する一般農山村，すなわち「領付村」へと変質傾向をたどり，1832(天保3)年には一村としての村立が許可された。しかし，前記のように折に鉱山水抜普請，間歩普請など鉱山稼ぎもみられ，また鉱山用御用木に障りのない小枝を薪炭にして売却渡世を続けているなど，一応かたちの上で「加ね山」の性格は維持されていた。

このように明治行政村下の「大字松倉村」は，明らかに鉱山と鉱山集落を合わせた「かね山」，すなわち金沢藩の「松倉山」であった。1872(明治5)年の18戸，1884(明治17)年の16戸，1900(明治33)年の12戸などの戸数は，文化～天保期ころの十数戸を基盤に形成され，前記天保期絵図にみられる春日社も明治末当時「字八ッ谷」に鎮座し，「天津兒屋根命」を祀る「村社」であった[11]。明治期に入り鉱区設定などの動きもみられたが日の目を見ず，明治末期には北海道や県内山麓平野部に移るものが目立った。1936(昭和11)年に最後の家が下山し，ついに廃村となった。広田寿三郎氏は消息の判明した14戸について転地先など調べているが，それによると魚津・滑川の平野部5，北海道5，足尾1，死絶2，不明1などとなっている。さらに広田氏は，その14戸の姓が金子5，金岩3，金森3，金谷2，金井1と，すべて「金」の字のつく姓であったことに着目している[12]。

〈「河原波山」〉 明治期には「大字松倉村」の西方，同じ角川源流域に「大字河原波村」の集落が存在した(第1図)。この「大字河原波村」の「小字銀谷」と称する場所などで，明治期，鉱区設定などの動きがみられたが，この場所こそ近世「越中七かね山」の一つ「河原波山」であった。1811(文化8)年「河原波山由来書上申帳」をみると，「慶長年中之頃ハ，加ね山大盛仕，御運上銀夥敷上納仕由ニ御座候」，「加ね山盛之時分，家数三百六拾軒余有之，数十年家業仕，其後寛文之頃ゟ，少々宛加ねも薄ら

き不繁昌ニ罷成，夫ニ応シ家数も次第ニ退転仕，延宝年中之頃，大飢饉御座候而，家数漸七拾軒計ニ罷成」などのごとく，「加ね山」の盛衰について伝承している。さらに同1811年「由来書上申帳」には，「当時山師家数拾軒御座候。山役銀四拾目，但シ壱軒ニ付四匁宛，毎歳上納仕候」とあり，また「山師家業加ね堀出シ不申ニ付，数十年之間河原波領之内ニ而焼畠仕，或ハ加ね山間歩所近辺，加禰山普請御用御林山枝木等之分薪ニ付，滑川等江売ニ罷越，渡世取続居申候所，隣村より少々請畠仕，粟・稗等作り，一日立ニ助命つなき罷在申候」などと記している。このように「加ね山」の衰微した文化期当時，家数10軒，上納山役銀40匁などとあり，さらに焼畑，隣村請畑，滑川方面への薪売りなど，残存山師の生活状況の一端を示している。近世中後期，まさしく「河原波山」も「加ね山」から一般「領付村」への変質過程をたどり，1832(天保3)年には「松倉村」同称に村立が許可され，村高3石5斗を有する「河原波村」の成立をみるに至った。

幕末期廃山同然の鉱山も，明治に入り再び経営する動きがみられたが，やはり明治末期にはほとんど廃坑の状態であった。「河原波村」の戸数も1872(明治5)年12戸，1884(明治17)年には14戸を数えるに過ぎなかったが，明治末期以降，松倉同様に北海道などへの移住が目立った。明治後期，「大字河原波村」の「字下段」に鎮座していた神明社は，「天照大御神」を祀る「村社」であったが，1921(大正10)年，松倉村大字池谷の「字堂ケ谷」に鎮座した八幡社に移され，合祀されて池谷神社となっている[13]。かかる産土神の移転に象徴されるように，大正後期には大字河原波の集落は廃村同然となり，最後の家が下山したのは1939(昭和14)年であった。

〈「かね山」周辺の集落〉 「松倉山」と「河原波山」は同じ角川の源流域にあったとはいえ，それぞれ別の谷間に分布していた。「松倉山」に通ずる谷間の小盆地状の山間に，明治期「大字古鹿熊村」の集落があった。「河原波山」に通ずる谷間の入口には「大字大熊村」の集落が分布していた。角川を下ると中世松倉城ゆかりの「大字鹿熊村」の集落があったが，これは上記古鹿熊から移住して形成された集落と伝え，また近くの春日・池ノ原なども古鹿熊の分村，いわゆる垣内であったという(第1図)。このように古鹿熊は角川山間奥地における古くからの居住空間の拠点であったと考えられるが，1670(寛文10)年の村御印草高は69石であった。また，前述のように「松倉山」が享保期には1石5斗を古鹿熊村の仮領として許可されるなど，松倉「かね山」などとの関係も当然強くみられた。古鹿熊の明治期の戸数をみると，1872(明治5)年93戸，1884(明治17)年には66戸であったが，古鹿熊の学校は1901(明治34)年に松倉尋常小学校(大字観音堂村)の常設分教場となった。明治末当時，「大字古鹿熊村」には春日社が2堂，「字春日平」と「字八ッ谷」に鎮座し，また「字八ッ谷」には曹洞宗総持寺派の神宮寺があった。この神宮寺はかつて真言宗であったが，金沢藩領になって禅宗に転じ，金山繁栄の祈願所になっていたと伝える。当神宮寺は鎌倉期の作という木造十一面観世音菩薩立像(1965年県重要文化財指定)の秘仏を蔵する文字通りの古刹であった[14]。なお「松倉山」にあった知恩院末光山寺のごときは，はやくも1676(延宝4)年に「かね山」の衰退とともに退転していたという[15]。

古鹿熊の集落は昭和10年代前半にみられた松倉や河原波の廃村後も存続したが，豪雪と交通不便な上に，燃料革命による山稼ぎの破

綻などで過疎化が進行し，1972(昭和47)年8月現在世帯数18，それが1974(昭和49)年10月現在では2世帯だけとなった。最後の家が下山したのは1991(平成3)年5月であったが，事実上は1972年後半を中心に急速に廃村化が進んだ。一部集団移住が早月川扇状地の魚津市大字弥源寺に向けられ，弥源寺には古鹿熊の移住集落が誕生することとなった。廃村化で神宮寺は廃寺となり，前記文化財の秘仏十一面観音は今日魚津の歴史民俗資料館に保管され，また廃校となった松倉小学校古鹿熊分校の跡には，現在「古鹿熊ふるさと会館」の小さな建物がぽつりとある。

古鹿熊分校の周辺には夏草に覆われた集落の屋敷跡・水田跡などが点在し(写真2)，道端に地蔵尊,「陸軍歩兵一等卒」の「故金子仁三郎碑」なども目に入る(写真3)。古鹿熊の夏の廃村風景の中から，松倉や河原波の旧「かな山」を山の彼方に追う。「かな山」跡一帯は1930年代前半に農耕馬を預る牧場経営も試みられたが成功せず，結局，県行造林などによるスギ林や雑木の薪炭林が広がる場所となった。みごとに成育したスギ林などの中に，古間歩など「かな山」の遺構・遺跡を追い求めてきた広田寿三郎氏を，前述のように1996年8月，魚津の自宅に訪ね多くの教示を得た。

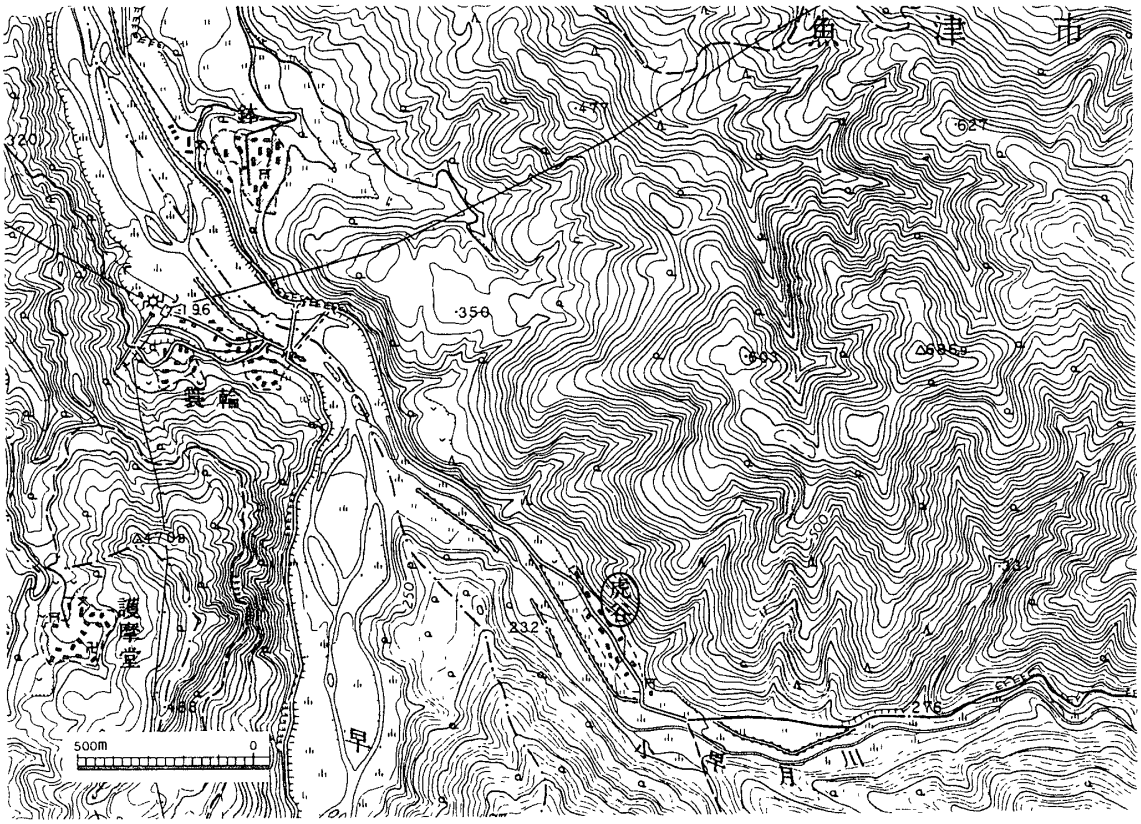
河原波の「かね山」に通ずる谷間の大熊村も，1670(寛文10)年の村御印草高が57石の近世村落であった。前記河原波の文化期「由来書上申帳」によると，「加ね山盛之時分」には「河原波山在所入口北ノ方」，すなわち「大熊村領の方」に門柵・番所などがあったと伝える。「かね山」の衰微にともない、もちろん門柵・番所なども廃止されたが，とくに隣村の大熊村百姓との間に各種の紛議が生じてきた。例えば1699(元禄12)年の文書をみると，「かね山」衰退後，残存山師がわずかに屋敷地で「なふき」(菜蕗)など作付していたところ，1里ばかり下の大熊村百姓が,退転山師の屋敷跡は「我々定之内ニ而御座候由」などと主張して紛議となっている。かかる紛議の各種の事例をあげ，「御慈悲を以八ケ所か祢山并ニ山師居屋敷拝領仕候様ニ」と,河原波山肝煎が金沢藩に願い出ている[16]。この大熊村の明治期の戸数は1872(明治5)年24戸，1884(明治17)年には26戸といった程度で，字竹越に「大国主命」を祀る日枝社が「村社」，いわゆる産土神として鎮座していた。その後戸数は漸減し，1975(昭和50)年の世帯数10，人口27は，1996(平成8)年9月1日現在世帯数が3，人口が6に減少している。離村した人たちも8月の旧盆にはムラに帰り，祭事，盆行事などを催して、日枝社の同じ氏子としての旧交をあたためているという[17]。3世帯だけの現在とはいえ、大字大熊の「区長」宅があり，その横から河原波の旧「かね山」に通ずる林道が，スギ造林の広がる夏山の中に消えていく風景を筆者は追った。

Ⅲ．早月川水系の「かね山」と跡地風景

〈「虎谷山」〉 「河原波山」の南方，早月川支流の小早月川河谷に,「越中七かね山」の一つ,「虎谷山」があった(第1・2図)。1811(文化8)年の「虎谷山由来書上申帳」によると，「松倉山」の山師仁兵衛というものが,1617(元和3)年に隣村・鉢村領内の「三枚六両」というところで金鉱を発見し，富鉱脈に当たって過分に金鉱を採掘したという。さらに，これを伝え聞いた「加ね堀仲間」たちが，「河原波山・下田山・亀谷山」などから大勢集まり，「三枚六両」続きの「三郎谷」ほか各所で採掘し，万治年中のころまで過分の運上銀を上納したと伝える。また上記「由来書上申帳」には，山師共居

屋敷，山師中作場(菜園場)などとして，鉢村領の内，都合63石6斗6升9合分が願出により山師中に拝領仰付けられたと，鉱山集落「虎谷山」が鉢村領から分割されていった様相が記されている。「虎谷加ね山盛之時分ハ，家数五百軒余出来仕申処」などと繁栄振りを伝承するが，寛文年中のころより，「山も不盛ニ罷成，家数も年々退転仕」の状態であったという。なお，前述鉢村領からの63石6斗余の割譲分に対して，山師などより山役銀として1か年銀150目を上納してきたが，山師困窮の元禄期に至り，上記山役銀150目を有家40軒分として家1軒につき，いわゆる棟役銀として，3匁7分5厘宛毎年上納することとなった。1695(元禄8)年の棟役銀「覚」をみると，「有家弐拾三軒分」の86匁2分5厘や「当年ゟ退転家三軒分」の11匁2分5厘などの棟役銀が示されている[18]。

かかる「かね山」の衰退で残存山師もほかに稼ぎなく，「右家跡々清水出御座候所を，加な土・木かぶ等取除，年々少々宛小田ニ仕置候」などのごとく，屋敷跡などの水田化を試みたが，これに対し鉢村よりあれこれ苦情がでた。そこで1718(享保3)年に「新開高仕度旨」を十村役に願い出たが，「かね山」は本来「無高」の場所であるから，鉢村の仮領ということになり，検分の上，10石8斗3升3合，免1ツ2歩で許可された。ほかに畠高7石5斗，定免5歩も定められた。鉢村の仮領から村高18石余の「虎谷村」として村立が正式に認められたのは1832(天保3)年で，虎谷村肝煎外6ケ村の肝煎連判による「堺界取極申定書」などによって，「虎谷村」の領域も定められた[19]。「かね山」から一般農山村の「領付村」に切り換え



第2図　1979(昭和54)年修正測量の越中虎谷周辺地形図

(国土地理院2.5万分の1「越中大浦」図幅)

られた1832(天保3)年当時，家数ら31軒で，1695(元禄8)年の26軒より多いが，明治期の戸数，すなわち1872(明治5)年の29戸，1884(明治17)年の30戸などと対比し，少なくとも30戸前後の集落が近世後期から明治前半にかけて維持されていたことがわかる。しかも，天保期村立の近世虎谷村，すなわち明治行政村下の松倉村「大字虎谷村」が，前述の松倉や河原波の旧「かね山」の場合と異なり，1996年8月現在廃村とならず，わずか9世帯とはいえ，魚津市「大字虎谷」の集落として存続していることは興味深い。

「大字虎谷」の集落は，幅広い砂礫の川原を形成しながら早月川に合流す小早月川の右岸にあり，本流早月川右岸の「大字鉢」の集落から通ずる道路沿いに，屋敷地が列状に並んでいた(第2図・写真4)。この集落下の「小字三郎谷」ほか各所に近世期の古い間歩跡がいまに残る。明治後も折々に金鉱採掘を細々と試みるものがあり，搗鉱製錬の水車などもあったと伝える。また虎谷には近隣河原波の神山鉱山の1902(明治35)年「坑夫取立面状」[20]を所蔵する家もあった。しかし，当地方の鉱脈は薄く貧鉱にして採算とれず，昭和初期ごろまでに廃鉱の運命をたどった。それ以前にすでに炭焼き出稼ぎが契機で北関東の那須野原に移住した村民が虎谷に7戸もあったという。戦後の1960年代後半には明治前期の半分程度の戸数となり，1975(昭和50)年センサスでは世帯数15・人口52を数えた。さらに過疎化が進み，1996年8月1日現在ではわずかに世帯数9，人口にいたっては13人だけという状態で，まさに高齢化は深刻である。1952(昭和27)年に虎谷や対岸の滑川町簑輪などを加えた組合立白倉小学校が「大字鉢」に創設されたが，目下，通学児童がいなくて休校中である。これはまさに高齢者ばかりの過疎ムラの実態を如実に示すものといえるであろう。

今日，空屋敷地のスギ木立や雑木・荒地などが目立つ集落(写真4)の中に，神明社(写真6)と八幡社(写真7)の2社が鎮座する。天保期村立当時の「虎谷村領分間絵図」[21]にこの2社をみるが，1909(明治42)年の『下新川郡史稿下巻』にも，「字村牧」に神明社と八幡社がともに「村社」として鎮座していたことが記されている[22]。神明社は集落を通り抜けた奥部，すなわち集落上に鎮座していた。「神明宮」拝殿前の鳥居と「神明社」と記す標石には「昭和三十三年」建立の銘があり，この年に神明社の修築整備がみられたことがわかる。これに対し八幡社は，その場所がわからず道端で尋ねた金山庄之助氏宅の裏，道路から入り込んだところに鎮座していた。神明社のように鳥居も狛犬もなく，「八幡社」の標示もない。補修された小さな社殿とその前に対の二つの大石がみられた程度であったが，社殿の裏にはスギの老木がそそり立ち，集落のほぼ中央の森をなしていた。隣接する「大字鉢」には八幡社，旧「かね山」河原波には神明社があったが，虎谷の集落には両社が「村社」，いわゆる産土神として鎮座していたことは興味深い。神明社の鳥居に寄進者の一人「四代山本豊一」の銘がみられるが，『魚津市史』にも「村の有志山本豊一家には」として，同家に天保期村立関係の絵図や古記録などが保存されていると明記しており[23]，「かね山」から村立した虎谷村の氏神として神明社がおもきをなしていたことが察せられる。なお，散見される廃家や「虎谷公民館」の古い建物などとは対照的に，集落の入口には，今日，上記の山本豊一家の新築された洋風のモダンな邸宅の風景(写真8)が異彩を放っているが，これらが廃村を食い止める役

割を果たすであろうか。

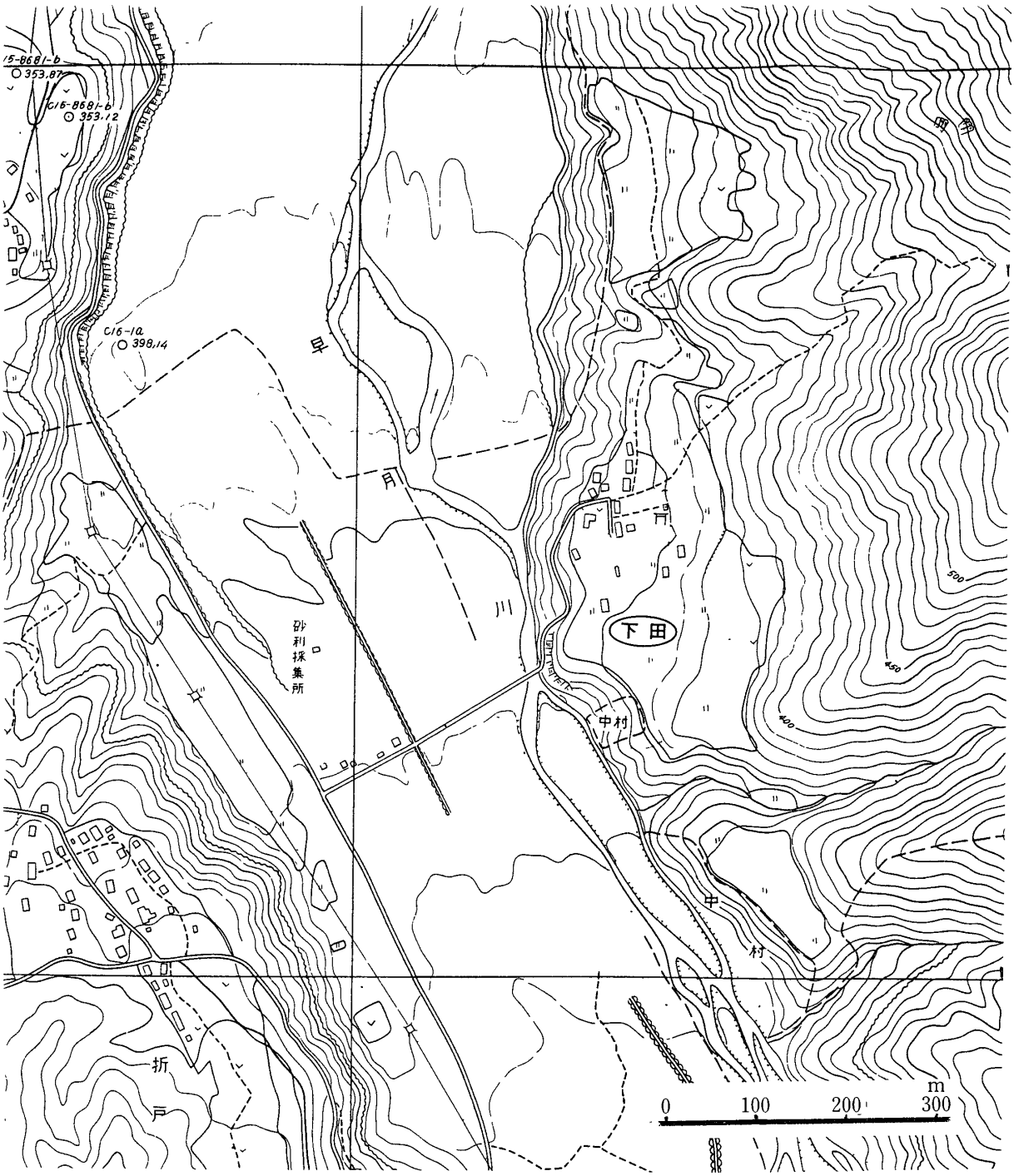
虎谷の集落の奥には小早月川水系の深い谷筋が続き，大規模な砂防堰堤工事が進められ，また下流には集落や水田などの生活空間を砂礫から守る護岸工事が目立つ。神明社の先には奥地への通行規制の標識が並んでいたが，その横に立つ「200M先　山菜料理いわなや」の立看板がすぐ目に入った。厳しい村落環境の中で，虎谷が今後どうなるか注目される。

〈「下田山」〉　虎谷の南方，早月川右岸の段丘上に立地した，中新川郡上市町大字下田（第3図・写真9）も，「越中七かね山」の一つ「下田山」で知られたが，1971（昭和46）年以降廃村となった。1811（文化8）年の「下田山由来書上申帳」によると，下田は往古「下田ケ嶋村」と称する百姓村で早月川の川原に居住していたが，1574（天正2）年に「かね山」ができ百姓と山師を兼業するようになったという。やがて早月川の度々の洪水で田畠も流れ，川原での居住が困難になったので，「上段ニ登り居住仕」，すなわち比高30m前後の段丘崖を上った段丘面上に集落を移したと伝える。その後，「加ね山段々繁昌ニ相成，家数茂三百軒余出来仕候」の状態となり，従前の石高地はすべて山師どもの居屋敷・菜園場などとして拝領をうけ，いわゆる無高地の「下田加ね山」となった。後には「かね山」不繁昌で家数も減少したが，とくに1680（延宝8）年の大飢饉で家数は28軒ばかりとなり，山役銀も棟1軒に5匁3分7厘宛になったと伝える。1811（文化8）年当時，家数は11軒であったと上記「由来書上申帳」に記している。

ところで「下田かね山」の衰微にともない，段丘面や下の川原などの旧居屋敷地や田地などの跡地を田畠に切り開くことが試みられ，1718（享保3）年には新開高を十村役に願い出ている。結局，前述の事例同様に，隣村，すなわち上流の早月川右岸に立地する蓬澤村の仮領となり，検分の上，草高6石1斗が認められた。この草高は1773（安永2）年には9石1斗までに手上げされているが，一村として村立をみたのはやはり1832（天保3）年であった。1811（文化8）年当時，「加ね山普請無御座候故，加ね山御用木ニ相障り不申枝木等薪ニ仕，上市等ニ持運ひ，或独活・せんまい等売払イ助命仕罷在申候」の状態であったと前記「由来書上申帳」に記している。

1811（文化8）年の家数11は，1872（明治5）年には6戸に減少していた。1887（明治20）年に越中射水郡出身の浅野総一郎がこの下田で金山経営に乗り出した。明治30年代後半から昭和10年代まで相次ぐ経営者によって開発が試みられたが，採算とれず長続きしなかった。1930（昭和5）年当時，白萩村大字下田の戸口も戸数14，人口118を数える程度であった。段丘面には水田が開け，集落の東奥には氏神の八幡社が鎮座する村落風景を展開してきたが，やはり戦後の高度成長期を経て，豪雪と交通不便な立地環境は過疎化に拍車をかけた。1970（昭45）年1月現在，世帯数が8，人口42であったものが，翌1971年2月には世帯数4，人口17，さらに同年3月に至っては1世帯と2人だけとなり，ムラは一気に解体，廃村と化した（写真10・11）。

下山したムラの人たちは同じ上市町内に移り住み，上市の中心市街地周辺の稗田・荒田・北島などに新しく居を講えた。下田の旧家で知られた伍嶋家[24]は本家・分家とも今日は稗田に住むが，氏神の八幡社は荒田に移され，1972（昭和47）年に神社境内の造営整備がなされた（写真12）。滑川方面に通ずる県道沿いの境内には，区長伍嶋昭平と三人の氏子総代の



第3図　越中下田の廃村前の集落とその周辺
（1万分の1「上市町全図其之二」上市町役場）

名前が発起人として刻まれている。境内まわりの石柱などには一連の寄進者の名前が刻まれているが，それらの中で「初代八山」，「富士化学工業株式会社」，さらに「第四班一同」の銘などがとくに目についた。「八山」は地元の鉱泉旅館で弘法大師ゆかりの「荒田弘法湯」で知られ，また医薬関係の富士化学は荒田に工場をもっていた。このように荒田に移った八幡社は，もと下田にいた人たちの氏神であると同時に，荒田の新しい氏神として地元民に迎

え入れられた。

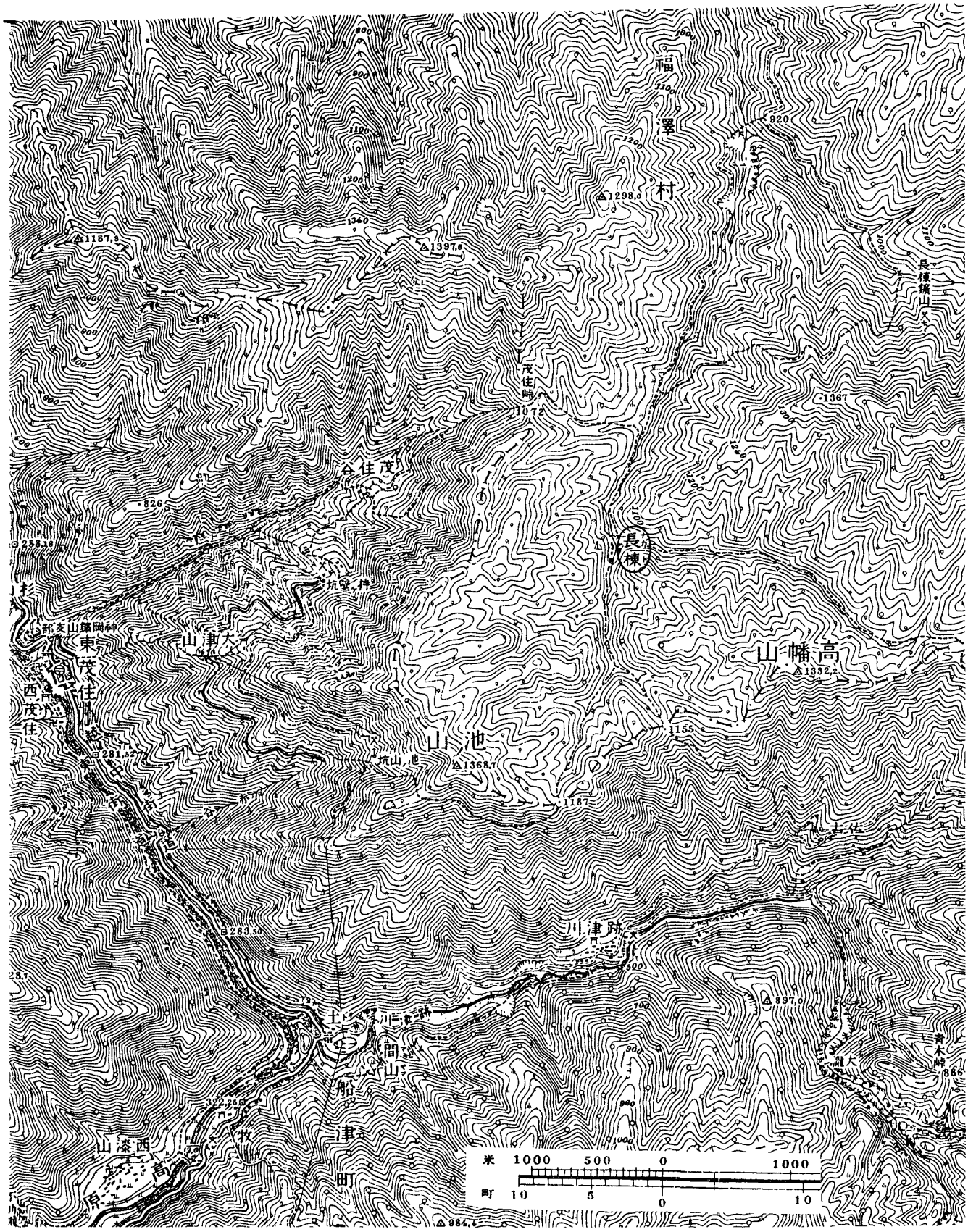
1996年の8月，早月川の小さなつり橋を渡り，崖を駆け上り独りで段丘上の廃村跡を訪ねてみた。クマが出没するから大声で歌いながら歩くようにと、つり橋のたもとで地元の人から注意されて入山した。下田の集落跡には植林後20数年を経たスギ林がうっそうと生え茂っていた(写真9・10)。屋敷・水田・道路・水路・古井戸などの集落遺構や，石臼などの生活用具が昼なお暗いスギ林の中に残存していた(写真11)。無人の深い森の中にメョウガなどが一面に生えている光景にも出会い，かつてのムラ人の生活を思い浮かべた。白金山の山麓や中腹などには古い坑口跡がみられ，集落入口辺りからその方面に入る道端のスギに，「下田金山」の小さな標示が示されていた。段丘崖下には早月川の砂礫の川原が見下ろされ，左岸には砂利採取場が広がっていた。左岸道路側から対岸段丘上の下田集落跡地を見渡すと，ただスギ林の森が続くだけであった(写真9)。

Ⅳ．飛越国境寄りの越中「かね山」と跡地風景

〈「長棟山」〉 今日の上新川郡域には，近世期，「長棟山」・「亀谷山」・「吉野山」の三つの「かね山」があった。「長棟山」と「亀谷山」はともに上新川郡大山町域にあったが，前者が神通川水系，後者は常願寺川水系と水系を異にした。神通川支流の長棟川源流域に分布した「長棟山」は，飛越国境に近い，標高1,000m前後の谷間にかつて集落を形成していた(第4図)。

「長棟山」は「越中七かね山」の中でも鉛山として知られたが，他の金銀山の「かね山」より開発が遅れ，その始まりは寛永4(1627)年と伝える。1811(文化8)年の「長棟山由来書上申帳」には，「寛永八年迄鉛山大盛仕，家数三百軒，山小屋八百軒斗，都合千百軒余御座候」と，寛永期の盛山振りを伝承している。その後，正保年中より寛文年間にかけ鉛山稼ぎは中絶・不振の状態におかれ，集落も1665(寛文5)年当時には家数14軒，山小屋23軒程度に衰退していたという[25]。鉛山稼ぎは寛文後期から宝永年間にかけ再興の動きを示したが，一進一退を繰り返し，1680(延宝8)年当時，山況も悪くなり家数30軒，山小屋20軒の状態になっていたと伝える[26]。近世後期の1811(文化8)年当時，他の「かね山」はすでに鉱山稼ぎが廃絶の状況にある中で，「長棟山」の人たちは，「外稼無御座鉛稼迄ニ而取続罷在申候」のごとく，鉛稼ぎをほとんど唯一の生活の糧としていた。1811年当時，家数は21軒，山小屋後見人台所1軒の状況で，山師1家単位の家族労働による小規模な鉛山稼ぎがなされていた。さらに1832(天保3)年には，他の「かね山」同様に，一村としての村立がみられ，無高の「かね山」から草高5石の領付村＝長棟村となった。「往古長棟村と申百姓ニ而，御納所ニハ，熊ノ皮毎歳上納仕申候」と伝えるごとく，長棟は米産なき深山幽谷故，主に産出鉛を基準に石付が定められたようである。

天保期に領付村として村立されても，長棟村はその立地環境から機能的には「かね山」で生きる道を歩み，明治初期に至った。明治10年代には集落の南方，池ノ山(1368.7)続きの国境北側に分布する，清五郎谷・播磨谷・鉛谷の3坑で稼行がみられた。例えば清五郎谷坑では，1877(明治10)年に山崎徳次郎以下14人の大工取立式が挙行されたが，この取立式で大工に取立てられた14人は長棟に住居をもつ人々であったという[27]。1887(明治20)年に三井組が長棟村の上記3坑の各坑場をそれら



第４図　1912(大正元)年測図の越中長棟・飛騨東茂住周辺地形図

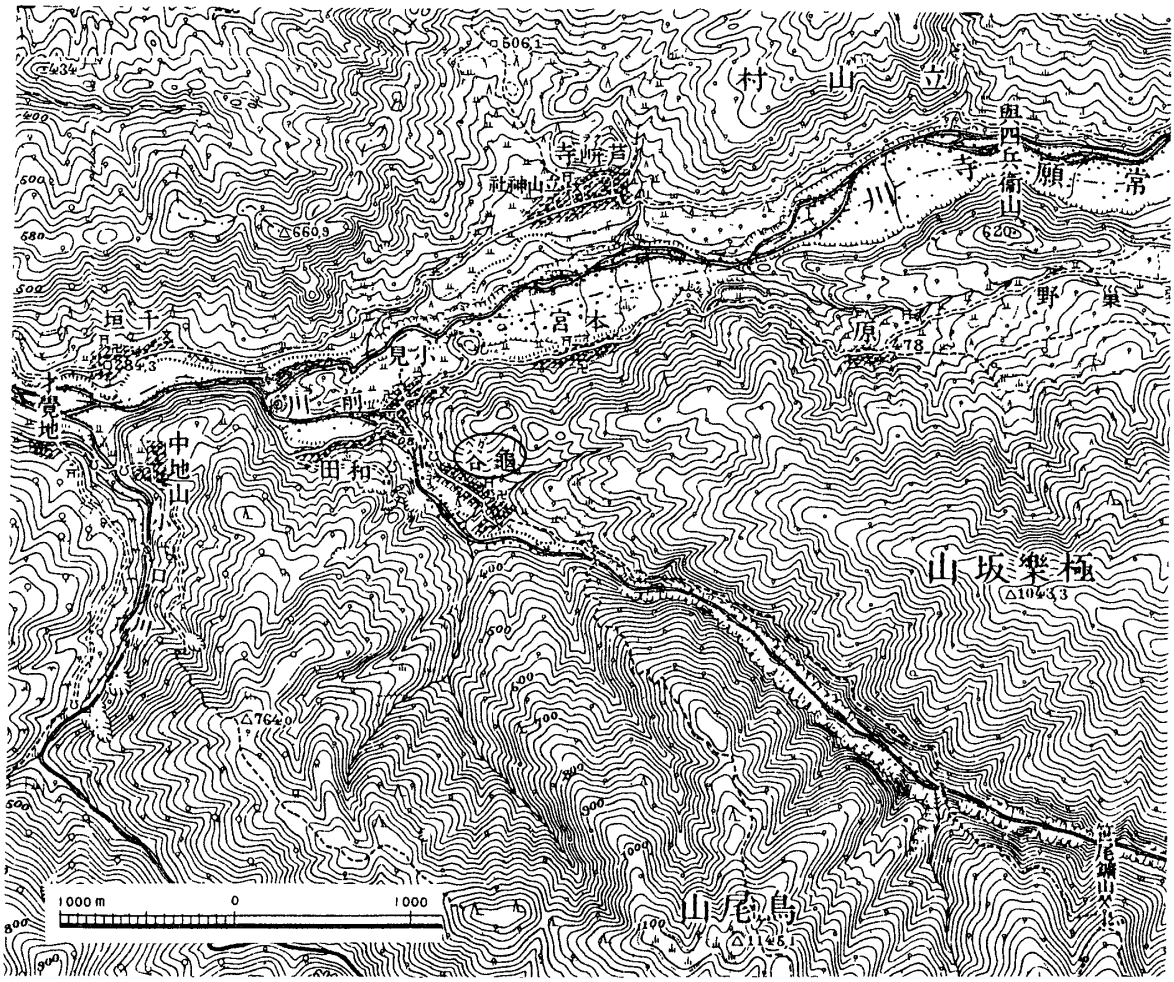
(陸地測量部５万分の１「鹿間」図幅，1915年製版)

の所有者から一括買収するに至り，長棟のムラの人たちは三井の神岡鉱山傘下で鉱業に従事することとなった。1889(明治22)年に上新川郡福沢村の大字となったが(第4図)，1896(明治29)年の戸数は32戸を数えた。1906(明治39)年には上新川郡教育会の尽力で，「長棟特殊教育所」が開設され，夏期だけ児童教育が実施されるようになった[28]。火災や洪水などの災害も続き，大正期には戸数が10戸台に減り，1930(昭和5)年当時，戸数10，人口56を数える程度となった。昭和10年代には長棟分教場も廃止され，ムラ人は西方に県境を越えて，岐阜県側の神岡鉱山茂住坑の大津山などに移り，長棟は常住者なき場所と化した。大字長棟の地下は，神岡鉱山茂住鉱区の一部として，鉱山近代化の過程において重要な役割を果たしたが，高所の古い地上集落は廃村の運命をたどっていった。大津山に移住した人たちは，長棟のムラの祭りには，坑道を通って長棟に帰り祭礼を営んだと伝える。

戦後の1949(昭和24)年の10月末，当時神岡町に住んでいた葛谷利春氏は，もと長棟の住人で大津山に住む山崎孝行氏の案内で吹雪の長棟に入った。山崎氏持家の無住家屋の中で榾火(ほたひ)で暖をとりながら，山崎家の役簞笥などを調査し，多くの貴重な近世文書を手にしたときの感激を葛谷氏は書き残している。葛谷氏が訪れたころ，長棟には空家3軒，観音堂一宇を残すのみであったという[29]。葛谷氏は三井勤務の人で，筆者は昭和30年代前半の神岡調査の際に大変な世話になり，長棟の話もよく聞いた。筆者は東茂住(写真1)を調査し，大津山にも訪れたが，茂住峠彼方の空遠く，長棟を訪れることもなく今日に至っている。天保期絵図[30]などにもみる，神明社・秋葉社・金毘羅社・観音堂などムラ人が信仰した堂宇の跡や地蔵などはどうなっているであろうか。秋の訪れも早い長棟の心象風景のみが広がる。

〈「亀谷山」〉 上新川郡大山町大字亀谷は，「七かね山」の一つ，金沢藩の著名な銀山「亀谷山」で知られた。長棟と同じ大山町域にあったが，今日は亀谷温泉でも知られ，1996年8月1日現在48世帯が住み，現地を訪れるのも容易で，隔絶した廃村の長棟跡とは対照的である。富山地方鉄道立山線の「ありみねぐち」で下車し，駅前の小見の集落(写真13)から，常願寺川支流和田川右岸の比高40m余の段丘崖を上ると，段丘面の高台に亀谷の集落がある(第5図)。集落の入口に，「歓迎亀谷温泉」の看板ゲイトがあり，その道端に1977(昭和52)年に建立された「亀谷鉱山関所跡」の標柱が立っていた(写真14)。

「亀谷山」は往古は亀谷村・柿木平村2ケ村の百姓地で高83石余を有していたが，1596(慶長元)年に「加ね山地ニ被仰付」，無高無反別，諸役御免に相成ったと，前記の1811(文化8)年「由来書上申帳」に伝える。さらに前述したように，「亀谷山」は寛永年中のころまでは大繁昌致し，「加祢山盛之時分家数千軒余，山小屋夥敷御座候」の状態で，金吹屋60軒，かじや50軒のほかに，7ケ寺，4社の社寺もあった[31]と，集落の繁栄振りを伝承している。盛山のころ亀谷在所の入口には左右に柵をもつ「御門」があり，諸道具品々，弓・鉄砲なども備えた「御番所」があったと伝えるが，これらは「かね山」の衰退後退転した。元禄のころより山師の困窮が目立ち，山の尾根など採鉱に支障のない場所で焼畠耕作など少しずつ試みるものがでてきた。これに対し隣の小見村百姓から苦情がでて紛議を生じたことについてはすで



第5図　1911(明治44)年測図の越中亀谷周辺地形図

(陸地測量部5万分の1「五百石」図幅，1914年製版)

に述べた通りである。他の事例同様に，1719(享保4)年には十村役に畠高を願い上げるに至り，結局は小見村の仮領という名目で草高9石1斗定免4歩，後の1744(延享元)年の手上高を加え，都合11石の草高が定められた。文化期当時，山師はほかに稼ぎもなく，「亀谷山」の内にて鍬柄・鞍木・足駄歯などを作って売出し渡世を続けていたが，あくまで「加ね山間歩所御林山江ハ一向相障り不申場所」において鍬柄作りなどの稼ぎがなされていた。しかもときには新しい鉱脈も発見され，「道草加ね」とはいえ鉱山稼ぎも細々とみられた。1831(天保2)年には，他の「かね山」同様に村立がみられ，村高11石の亀谷村一村が成立した。1834(天保5)年正月に，御次金山方御用兼帯が連名で亀谷村百姓中にあてた文書に，「然上者猶以御郡方御定之趣心得違無之，大切ニ相守且かね山稼方も出精可相心得者也」とあるように，村立されたとはいえ，あくまでも「かね山」の稼方にも出精すべしと達しが出されている[32]。

この「亀谷山」の明治後において注目すべきは，1887(明治20)年12月に，三井物産会社が古河市兵衛の保有する先願権を譲り受け，亀谷鉱山の買収に乗り出していることである。亀谷村共有地における銀・銅・鉛鉱の試掘出願にあたって，三井物産と古河が激しく競合し，渋沢栄一による調停の結果，三井物産が

古河の先願権を譲り受けるというかたちで落着した[33]。1889(明治22)年2月には,亀谷鉱山は飛騨の茂住鉱山とともに,三井物産会社から三井組に譲渡され,神岡鉱山の支山となった。しかし,1890(明治23)年12月末現在の亀谷鉱山の総出金高は6万29円,山評価額は5万円で,茂住鉱山の総出金高31万9866円,山評価額15万円と対比して,鉱山の評価は低かった。三井買収後も亀谷鉱山の本格的操業は進まず,経営収支も欠損が続いた。茂住が1892(明治25)年上半期にはかなりの益金を計上したが,亀谷の半期ごとの欠損額は一向に減少しなかった[34]。三井は1898(明治31)年ごろ稼働を中止した。1910(明治43)年ごろ三井は経営を再開し,閃亜鉛鉱やカラミなどからの亜鉛生産,さらに周辺の鉛鉱山の開発などに着目するも,大正末には経営は頓挫した。1931(昭和6)年には大山町が三井に鉱山の再開を促したが見送られ,茂住が長棟など飛越国境域の諸坑を統合した茂住鉱区として,神岡鉱山の主要鉱区の役割を果たしていったのときわめて対照的であった。この三井以外にも亀谷付近で鉱山を手がけたものがみられた。例えば竹内鉱業㈱が明治40年代には亀谷奥地の笹尾鉱山(第5図)などの開発に乗り出していたが,1914(大正3)年ごろ経営難で施設を石川県の遊泉寺銅山に移し,休山するに至っている[35]。

このように「七かね山」の中でも明治以後三井資本の進出をみた点で注目されたが,それも大正期までで,大資本による鉱山集落の本格的な形成をみるまでに至らなかった。なお大正期には,1918(大正7)年8月16日付の「三井亀谷鉱山　坑夫一同」の「坑夫取立面状」[36]にみるごとく,未だ「友子制度」下にあった亀谷の鉱山社会の一端を示していた。昭和期には鉱山に代わって電源開発が当地方で台頭し,昭和10年代には和田川源流域で有峰ダムの建設が着工され,それが戦後の1961(昭和36)年に完成をみるに至った。この有峰ダム完成の翌年には有峰林道が竣工し,小見・有峰間にバスも通うようになり,有峰や薬師岳(2,926m)などへの登山・観光ルートの入口となった。とくに1972(昭和47)年には亀谷温泉が開発され,湯元貴水館,国民宿舎白樺ハイツ,ホテルおおやま,ほかの観光施設やテニスコートなどが相次いで登場した(写真20・21)。また大山町はこの亀谷に歴史民俗資料館を1984(昭和59)年に設立した(写真20)。なおこの資料館には砂防と発電,有峰と薬師岳の各展示室とともに,亀谷銀山の展示室が設けられているのが注目された。しかし,この鉱山関係の展示資料は未だ豊富なものとはいえず,また集落内に,前記の「亀谷鑛山関所跡」のほかに,「亀谷銀山選鉱場跡」や「吉原坂」などといった標柱が立てられているものの,鉱山時代の遺跡・遺構などの保存は比較的に乏しい。

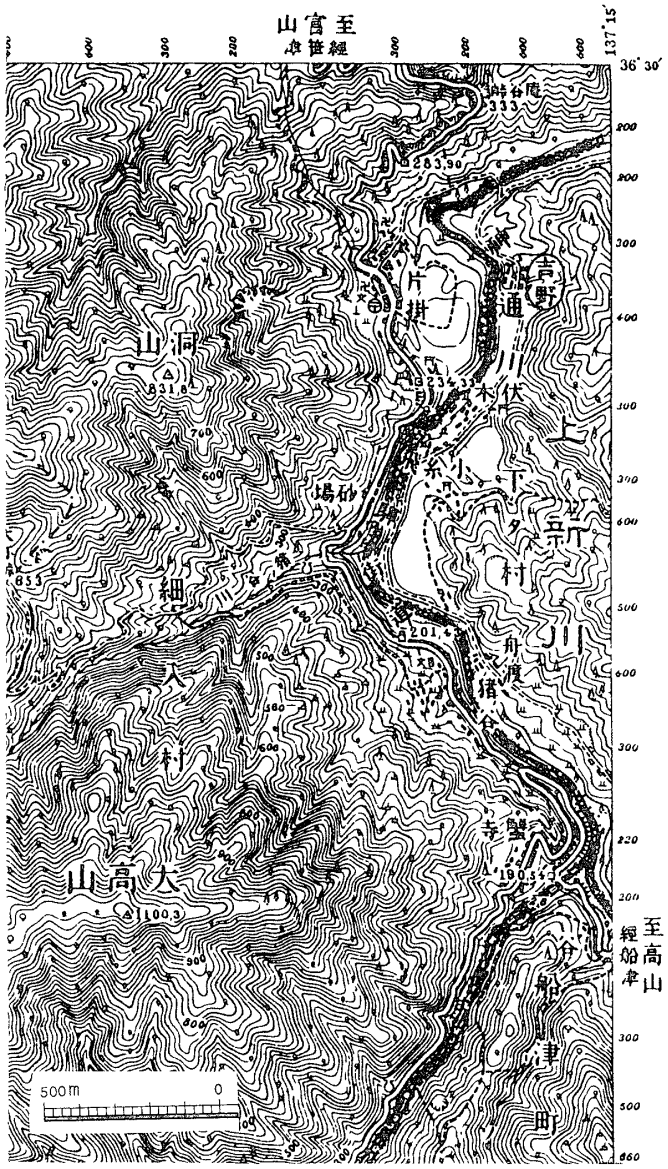
ともあれ,鉱山が閉山しても亀谷の集落は存続し,戦後に限っても在来戸数50戸程度の集落規模は維持されてきた。前述のように,銀山盛時にはいくつもの寺社があったと伝えられているが,今日は浄土真宗西法寺と曹洞宗金昌寺の2ケ寺と,それに「村社」の神明社がある。集落入口から有峰林道沿いに家屋が並び,まず右側に西法寺,その先左側前方に神明社の森が見える(写真15・16)。西法寺は「越中国新川郡亀谷村総道場」であったが,神明社横の谷奥にみる金昌寺(写真17)は銀山ゆかりの寺院で知られた。この金昌寺は飛騨東茂住の曹洞宗金龍寺の末寺で,金龍寺二世比庵良萩和尚を聘して開山したと伝える。東茂

住の金龍寺は国道41号線沿いの一角に産土神の神明神社と相並んでみられる(写真1)が，その入口に「岐阜県指定史跡金森宗貞邸跡」の標柱や，「宗貞金森翁之碑」が立っている。この金森宗貞，いわゆる茂住宗貞こそ神岡鉱山前身の和佐保銀山や茂住銀山の発見者で，さらに亀谷銀山の開発をも導いた人物と伝承されている。この宗貞が「金山繁昌ノ祈願所」として東茂住の金龍寺和尚を聘して金昌寺を開いたと伝えるが，金昌寺には本堂とは別棟で宗貞公位牌堂が1960(昭和35)年に建立されている(写真18)。その横に「茂住宗貞翁之碑」(写真19)があるが，これはすでに1925(大正14)年に三井会社によって建てられた[37]。

このように茂住宗貞ゆかりの金昌寺は，1996年8月訪問当時，本堂の再建中であった。入口に「金昌寺本堂再建寄付者芳名」として，白木板に記した寄付者名が寄付金額別に並べて掲げられている風景に出会った。それによると，最高額200万円の寄付者1名，それは下新川郡大沢野町八木山の同じ曹洞宗の禅定寺であった。次いで3名の金昌寺檀家総代が150万円ずつ寄付しているが，そのうち2名が亀谷居住者であった。さらに100万円の大口寄付者13名中，10名までが地元の亀谷に住む人たちであったことが注目された。そのほか，20万円寄付者1名，10万円寄付者に5名の亀谷在住者の名がみられた。あとは3万円とそれ以下のところで，和田・小見・本宮・原・粟巣野・中地山・戈覚地・牧など，常願寺川左岸近隣集落からの多数の寄付者名がみられたが，それらと並んで亀谷居住者の名も散見された。ともあれ，50戸程度の亀谷の集落で，上記のごとく100万円以上もの大口寄付者が12名もみられたことは，衰退・消滅に向かった他の「七かね山」ゆかりの集落とは様相を全く異にしていた。150万円を寄付した檀家総代のI家のごときは地元で建設業を営んでいるが，亀谷トンネルや真谷トンネルほか各種の建設土木工事が地元・周辺で相次ぎ，それらの工事基地的な性格が目についた。

〈「吉野山」〉 JR高山線猪谷駅北方，国道41号線庵谷トンネル南口の越中婦負郡細入村片掛から，神通川第1ダム(神一ダム)を望むと，対岸段丘面上に下新川郡大沢野町吉野の集落が目に入る(写真22)。この吉野が「越中七かね山」の一つ，「吉野山」の遺称地とされる(第6図)。しかし今日の吉野の集落は，かつて神通峡の低位にあったものが，神一ダムの建設で1953(昭和28)年に19戸が水没し，その水田など開ける高位の段丘面に移ったものである。産土神の蔵王社もダム建設で高い石段を上る現在の場所に1952(昭和27)年に造営されたが，その境内には水没ゆかりの記念碑がある。神一ダム下の神通峡に架かる吉野橋を渡ると，段丘上の集落に通ずる県道上り口に地蔵堂があり，「野仏の道入口」の道標が立っている。そしてその前の道路沿い崖縁に，大沢野町教育委員会による「吉野銀山坑道跡」や同町観光課の「天正年間からあった越中七かね山の一つ　吉野銀山の跡」の標柱がみられた(写真23・24)。その場所を出会ったムラの老婦に教えられ驚いたが，スギ林と夏草で覆われた崖地で，「坑道跡」をすぐに確認する術はなかった。

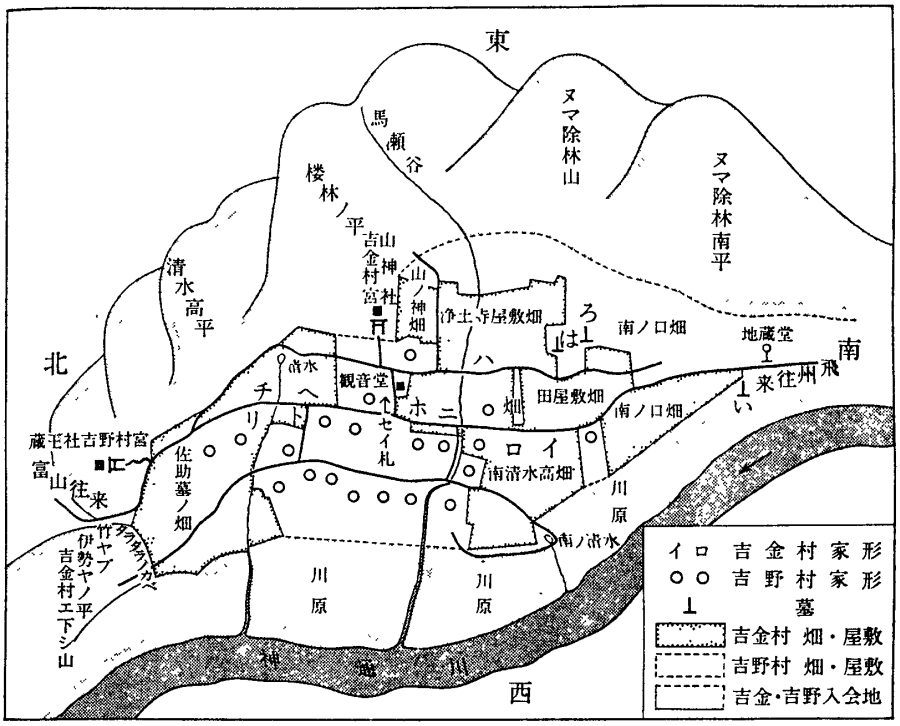
1811(文化8)年に吉野山肝煎の清右衛門が十村役に差し出した「由来書上申帳」をみると，「天正元年銀山堀初」，「慶長年中ニ間歩一口ゟ一ケ年切ニ判金千両宛，打続九ケ年之間，毎歳上納仕申候旨御座候由。夫ゟ段々山大盛仕」などと，17世紀前半にかけての「かね山」の開発・繁栄の様相を伝えている。さらに，「加



第6図　1912(大正元)年測図の越中吉野周辺地形図
(陸地測量部5万分の1「白木峰」図幅，1915年製版)

ね山盛申時分，家数千軒計モ出来仕候而，慶安四年ニ山師共四千八十歩拝領地被仰付」などと伝える繁栄振りも，延宝期の大飢饉を契機に山師も60軒ばかりに減ったと記し，そして文化期当時には，「唯今居住之山師漸九軒罷在申候」といった集落の衰退様相を書き上げている。なお，この「由来書上申帳」でとくに注目されるのは，「吉野山々師之義ハ，外六ケ所加ね山与違ひ，吉野山ト申加ね山之地無御座候ニ付，御郡山之内ニ而，吉野山・伏木村・舟戸村・小原(糸)村，右四ケ村加ね山場所ニ相成居申候故，何方ニ而モ鉱色見出シ候得ハ，加ね山普請仕而モ，草切御運上銀指出不申御格ニ御座候」などの記述である。すなわち，他の越中6かね山と異なり，「吉野山」だけの単独の「加ね山」の地はなく，神通川右岸の吉野山・伏木村・舟渡村・小糸村の新川郡4ケ村が，いわゆる「加ね山御格」の場所であったというのであろう。上記4ケ村の中の「吉野山」は，百姓村の吉野村の中に別個に形成された山師拝領地などからなる独自の金山肝煎支配地と考えられ，それは1832(天保3)年の村立で「吉金(よしかね)村」(吉加祢)となった[38](第7図)が，明治行政村下では大字吉野に吸収された。したがって前記の1811(文化8)年当時，「唯今居住之山師漸九軒罷在候」とあるのは吉野村の中の「吉野山」，いわゆる「吉野かね山」(吉加祢)の山師家数が9軒ということである。ちなみに1872(明治5)年の「吉金村」の戸数も9である。文化期当時鉱山稼ぎがなく，上記残存山師たちは前記の山師拝領地や吉野村の百姓方からの請畠でアワ・ヒエ・タバコなどを作付したり，飛州往来駄賃持ちなどで渡世を続けていた。なお，1772(安永元)年より飛州国境に位置する金沢藩の東猪谷村関所の口役取立も10ケ年請負い相勤めてきたと伝える。

ところで，明治後の鉱山開発も振わず，1900(明治33)年に，当時石川県で尾小屋鉱山を経営していた旧加賀八家・横山家が吉野鉱山の開発に乗り出したが，数年にして廃鉱となった。富山に通ずる三井の神岡鉱山軌道馬車も吉野の高位段丘面を通過するようになっ



新川郡山室組吉金村領分間絵図　天保３壬辰年５月
イ庄兵衛　ロ佐兵衛　ハ九左衛門　ニ仁右衛門　ホ七兵衛　へ四郎兵衛　ト三右衛門　チ清右衛門　リ吉蔵　い清右衛門墓　ろ五郎右衛門墓　は覚兵衛墓　　原絵図 67.5×110 cm（金沢市立図書館所蔵）

第７図　1832（天保３）年の越中吉野村・吉金村
〔小葉田　淳（1986）『続日本鉱山史の研究』p. 456の図15転載〕

たが，近代化による吉野鉱山の再生はみられなかった[39]。

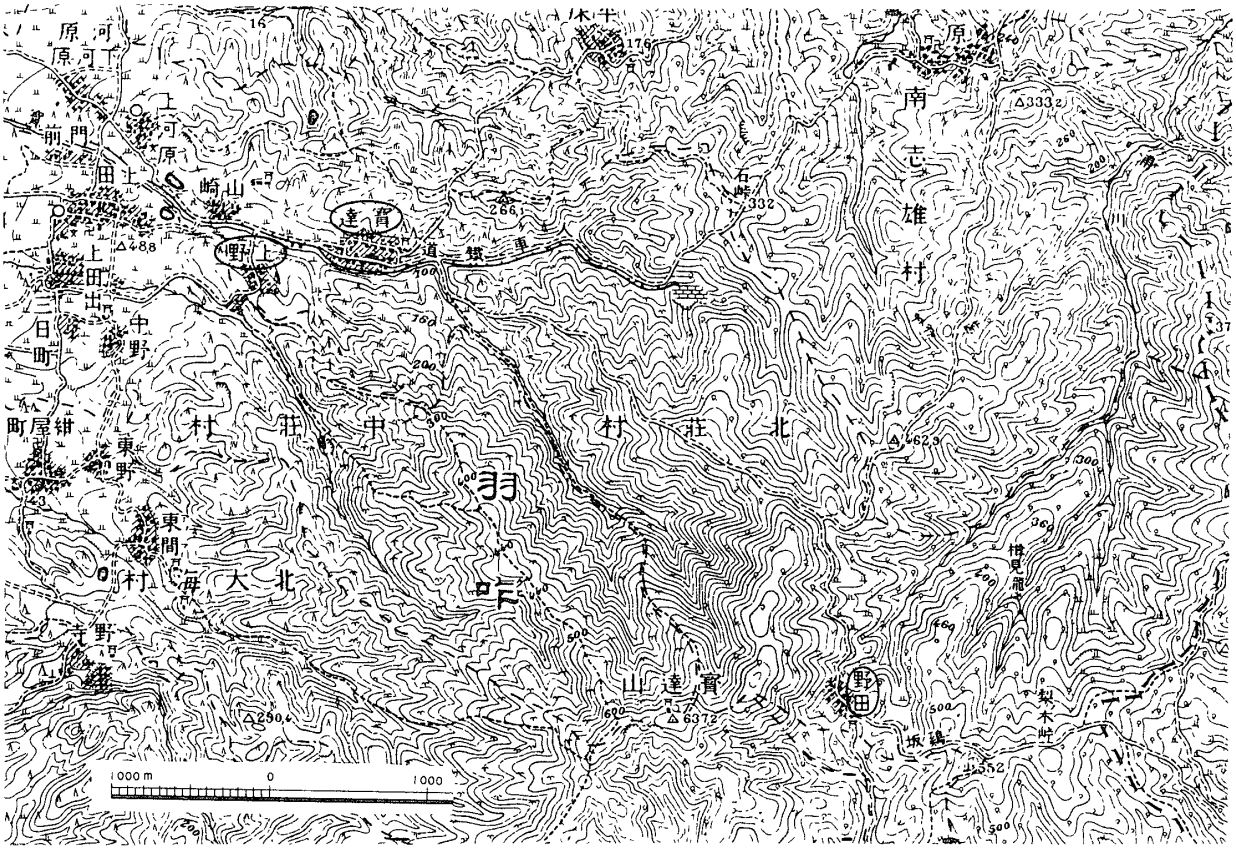
Ⅴ．能登・加賀の「かね山」と跡地風景

前述したように，「越中七かね山」ゆかりの集落域は，明治後の鉱業近代化によって，鉱山集落として本格的に再生することもなかった。事実，『日本鉱業誌』掲載の1908（明治41）年度「重要鉱山鉱産額（金・銀・銅・鉛）及鉱夫数」の表[40]をみると，富山県関係の鉱山はこれには全く表示されていない。これに対し石川県は尾小屋・遊泉寺・倉谷・金平・阿手・富来の６鉱山が表示されているが，能登の富来鉱山を除けば他はすべて加賀の鉱山である。

〈「宝達かね山」〉　能登には慶長ごろ盛山したと伝える宝達金山があったが，寛文期には産金が衰え，明治後も試掘関係がみられた程度であった。宝達山（637.4m）の北西麓，宝達川の谷口集落をなす押水町大字宝達，いわゆる近世宝達村が「宝達かね山」ゆかりの集落とされる[41]。宝達村は1712（正徳２）年の検地で高155石余，定免２歩，畑高のみの村立が正式にみられたが，すでに寛文期には村請制になっていたといわれる。宝達村には宝達の本村のほかに，宝達山頂東側の野田と，本村西方の上野の２つの垣内があった（第８図）。1864（元治元）当時，宝達94軒，上野24軒，野田６軒を数えた。遠く隔絶した野田の垣内は，間歩に近接した初期の「かね山」でもあったが，1958（昭和33）年には無住となり地図から姿を消した。「宝達かね山」の衰退でかね掘り

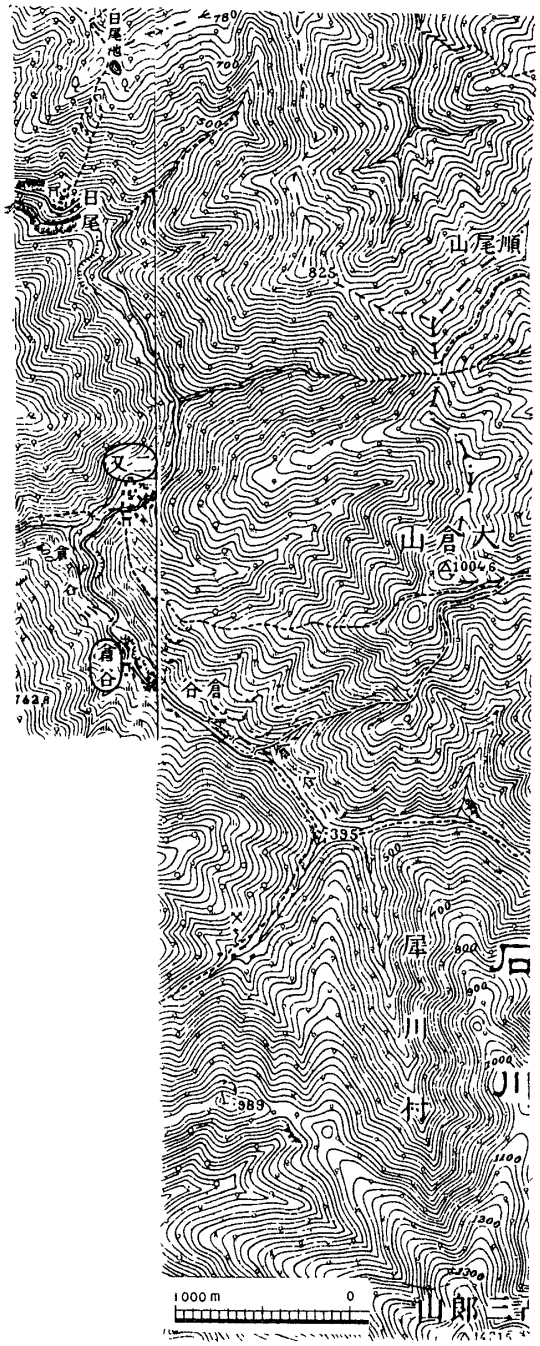
たちは畑地を切り開いて村立をもたらしたが，薬用の葛(くず)根，食用の葛粉など，古くからの「宝達くず」の特産が，昭和期になっても村人の重要な生活の糧となった。明治期に神明社を改称した宝達神社や，真宗大谷派の泉福寺のある宝達本村は，上野垣内を含め，1970(昭和45)年当時，戸数81，人口381の集落規模をなお維持していた。

〈「倉谷かね山」〉 ところで，加賀の倉谷や金平も金沢藩の重要な金銀山であった。金沢城下を流れる犀川源流域には，近世期，倉谷・二又・日尾・見定の「才川奥四ケ村」があった(第9図)。最奥倉谷村の集落より上流の金山谷川などの渓谷を中心に，慶長・元和期に銀山が盛山し，いわゆる「倉谷かね山」の成立をみたと伝える。17世紀後半には下流二又村の段丘面上に銀山町が移されたが，享保期以降は「かね山」としての機能を失い，明治期再開まで廃山同然であった[42]。1877(明治10)年ごろから鉱山が再開され，とくに1893(明治26)に杉山次郎が設立した倉谷鉱山株式会社によって漸次近代的な採鉱・製錬などが試みられた[43]。1908(明治41)年度には鉱夫数352を数え，金・銀・銅のほかに鉛の産出が目立った。しかし，明治20年代にはすでに犀川の鉱毒問題が台頭し，一触即発の状況にあったが，結局1910(明治43)年には廃山を余儀なくされた。戦後の1966(昭和41)年に完成した犀川ダムで，倉谷10戸，二又新町19戸が水没移転し，今日は前記「才川奥四ケ村」の集落はすべて姿を消している。1927(昭和2)年刊の『石川郡誌』には，二又に誓入・法住・廣徳・宗永の4ヶ



第8図　1909(明治42)年測図の能登宝達山周辺地形図

(陸地測量部5万分の1「石動」図幅，1913年製版)

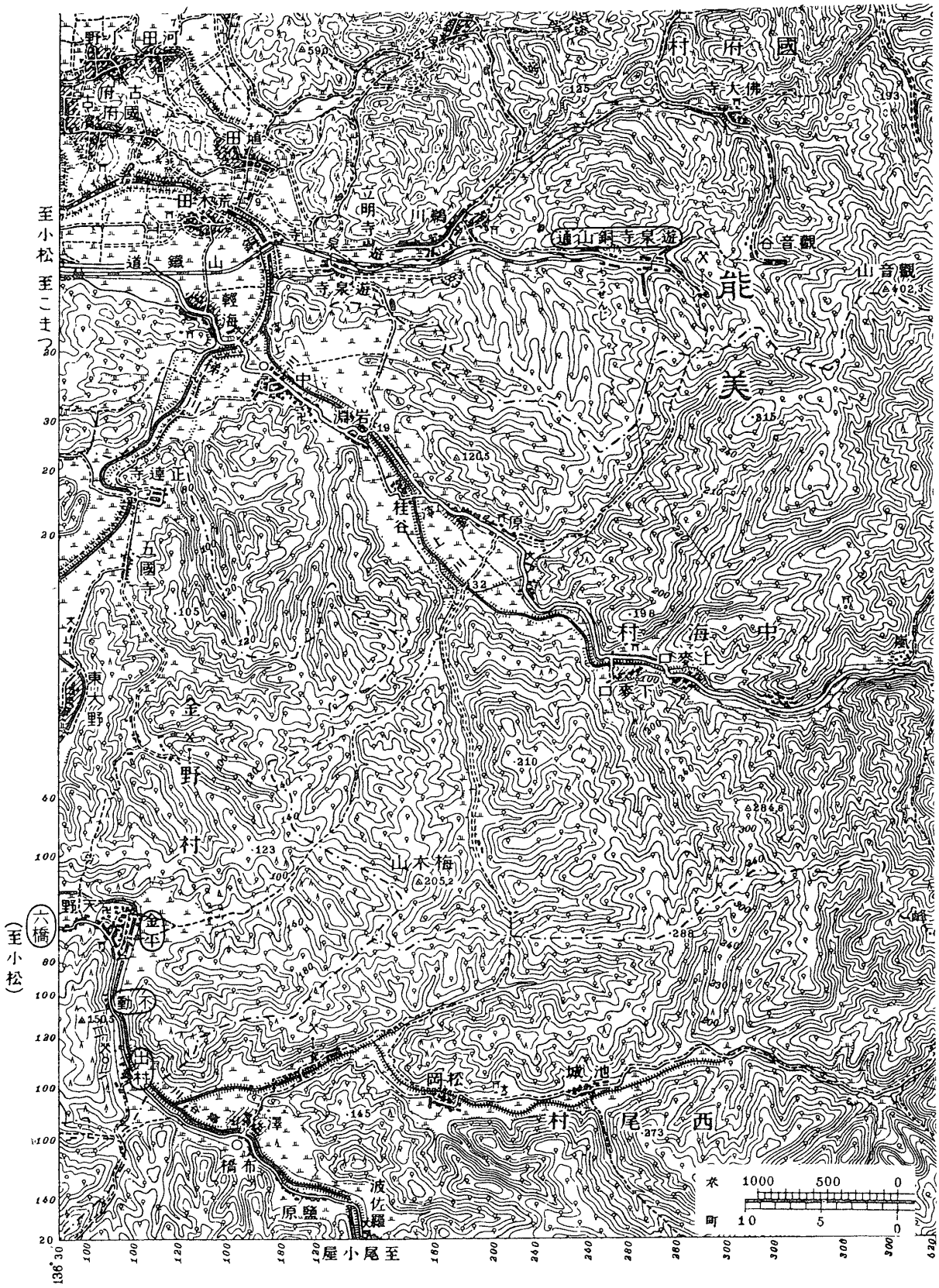


第9図　1910(明治43)年測図の加賀犀川水系の倉谷鉱山周辺地形図　(陸地測量部5万分の1「鶴来」「下梨」図幅, 1913年製版)

寺址があることを列挙して,「石川郡倉谷村銀山町に寺跡四ヶ所あり」の伝承を跡付けており，また倉谷に日吉神社，二又に多賀神社の両村社が鎮座していることを記している[44]。かかる集落跡やその奥地の鉱山跡など，それらの跡地風景を追うことは，犀川ダムや夏は草木などでまず困難である。

〈「金平金山」〉　安宅湊に注ぐ梯川水系の金平金山は，他の「かね山」に遅れて18世紀後半の安永年間が最盛期で，その後も稼行が細々続き，幕末期には金沢藩唯一の金山であったといわれる[45]。1670(寛文10)年の村御印で620石の村高をみた能美郡金平村には，幕末期，金平本村のほかに六橋(ろつきょう)・不動・出村・金山(かなやま)などの枝村があった。金平村は北と東が梯川支流の郷谷川でほぼ囲まれた場所にあり，大杉川との合流点に近い北の六橋(写真25)から，湾曲部の本村，東の不動・出村と郷谷川の左岸に集落が分布していた[46](第10図)。不動山をはじめ，それら集落背後の山地や渓谷に多くの坑口や砂金がみられたが，これら金山経営の主役を演じたのが六橋に君臨した十村役の沢村源次，いわゆる石黒家であった。石黒家は小松から金平村に入る玄関口，六橋の集落背後，八幡社参道口東側に宏壮な邸宅を構えたが，その屋敷跡は明治半ば以降公共施設用地となった(写真27)。

なお，上記六橋には産土神の八幡社が鎮座していたが,1910(明治43)年に「当字入会地無格社」の山神社を合祀して村社八幡神社と改称されている。山神社は当初六橋の集落北西方の小丘上に鎮座し，六橋・道頓堀・金山などの集落域を見下ろす位置にあったが，まず八幡社本殿背後山地に，さらに同神社境内の現在地に移された(写真29)。八幡神社境内の稲荷堂には，金平金山発見の伝承にまつわる白狐を祀るが，かつて石黒家屋敷地にあったものを移したと伝える(写真30)。なお，当神社拝殿前には安永10年願主石黒家の銘の入った石灯籠があるのに気がついた(写真28)。この八幡社の両側谷筋，いわゆる宮谷の渓口を中心に「金場」,すなわち「金山町」が形成され,



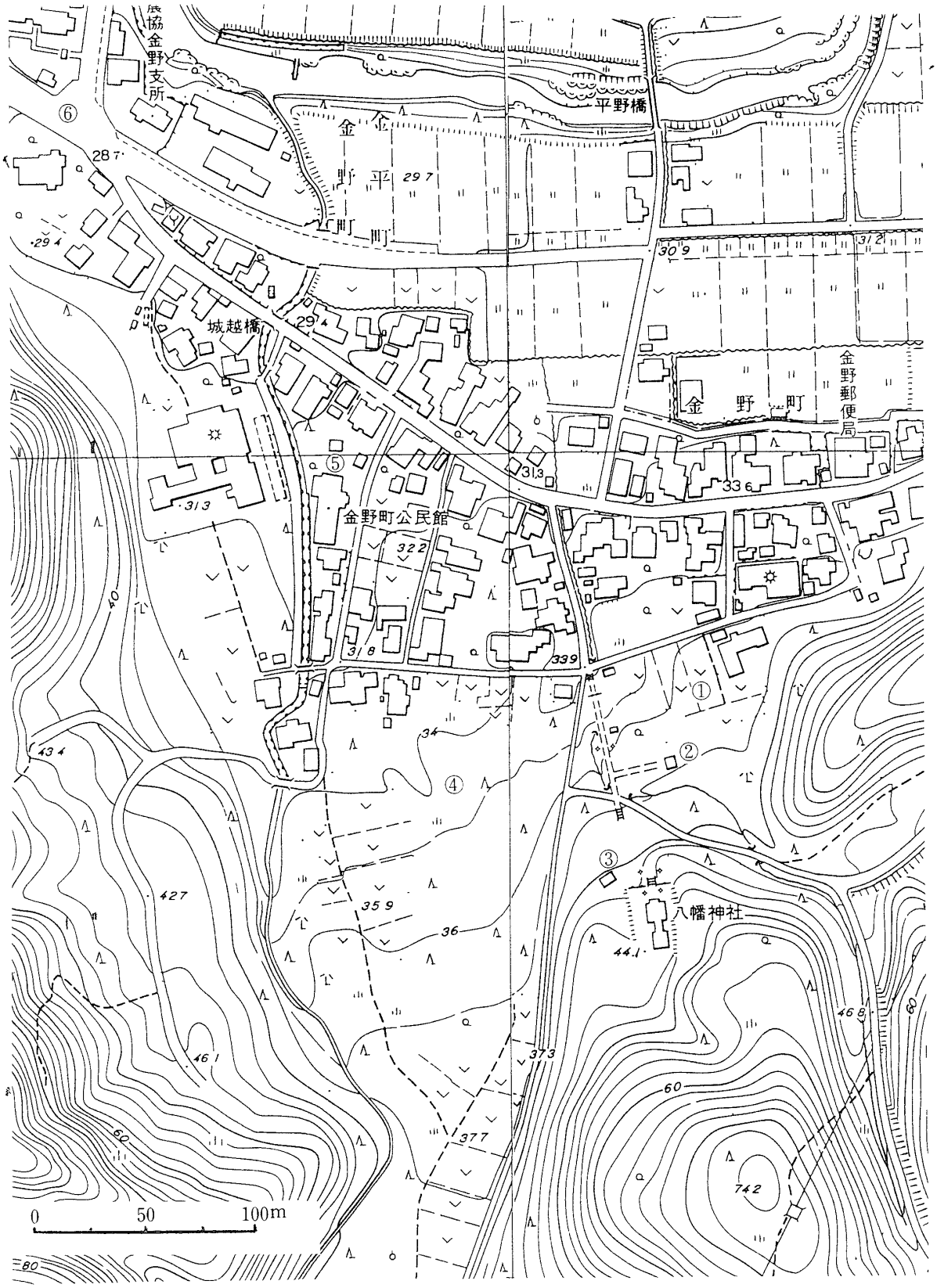
第10図　1910(明治43)年測図の加賀遊泉寺銅山・金平金山周辺地形図

(陸地測量部５万分の１「鶴来」図幅，1913年製版)

明治後も「金山」の小字名を残すに至ったものと思われる(第11図)。この「金山」は，十村役の源次が宮谷に開墾した新開地に各地からの坑夫などを居住させ，ネイティブな金平村内に，「加禰山」と称する特別区域を新しくつくったものと伝えられ，その様相の一部は石黒家など所蔵の「金平鉱山絵巻」(「金山町絵巻」)で広く知られている。この絵巻は金沢藩士で画家の矢田四如軒の作といわれ，坑口前に広がる商店街や芝居小屋，傾城町，さらに惣門番所，金場小屋，山師小屋など，金山盛期の様相がみごとに描かれており，その上製本とみられる「歴博本」は県文化財に指定されている。しかし，小葉田博士は「どの程度金山町等の実態を写しているかは疑点がないではないが」[47]と，その絵巻について言及されている。たしかにそこに描かれている風景は，近世鉱山町一般の心象風景そのものを描いたものと解されるほどにみごとである。その絵巻が盛時の金平金山町の実態を具体的に描いたものとするには，その描かれた時期やその場所をはじめ，綿密な検証が必要であると考える。

さらに十村役の源次は金山の守護神として前記の山神を六橋北西の小丘上に勧請したが，金山盛時，山神祭には大坂方面からも役者など集まり大いに賑わったと伝える。大坂の盛り場名にちなんだ「道頓堀」の小字名を明治後も残すが，大正期に至るも金野村の村役場所在地を「道頓堀」と称して，芝居小屋などで賑わった盛時を伝承している。このように「金山」や「道頓堀」の小字を含めた六橋地区が，産土神の日吉社が鎮座する「本村」に対し，石黒家を核に金平金山の中心地をなしていた。近世初期繁栄の金銀山町に広くみられた寺院は，18世紀後半以降の金平金山町域には見当たらず，金平村には「本村」に真宗大谷派の道場，すなわち明治後の宗栄寺をみた程度である。この「本村」南の「不動」は，山麓高所に堂宇を有する不動尊(写真31)に由来したが，十村役の源次は坑道入口に地元民が崇敬した不動尊を祀り，鉱山の繁栄を祈願したと伝える。この「不動」から南の「出村」にかけていくつもの坑口が分布した(写真32)。「出村」には白山神社が鎮座するが，これは「出村」の産土神である大山祇神を祀る山祇社であったといわれる。

近世金平金山の経営形態には，十村役石黒家の請山，藩の御手前山，村請自稼山などがみられたが，日本坑法登場の1873(明治6)年には金平村民の有となり，松下嘉平以下4名を惣代として借区許可を得た。以後，自稼人各自による零細な稼行がみられた。地表近くの金鉱はきわめて小規模な混汞法および青化法によって製錬されていたが，かかる金鉱製錬用の水車は，郷谷川を堰止めて水を引き回転させていた。1904(明治37)年ごろから1907(明治40)年にかけて，採掘鉱石中から亜鉛鉱を選鉱し輸出されていたが，1908(明治41)年度の産出額は金8,887匁だけで，亜鉛鉱などほかの産はみなかった。しかし，地下深く掘進するにしたがい，銅鉱よりむしろ亜鉛鉱が目立ち，「出村」付近の三笠坑で当初亜鉛鉱を多量に産した。三笠坑南の龍門坑や初音坑でも閃亜鉛鉱などの存在が，1910(明治43)年の農商務省鉱山局の調査で確認され，「金鉱採掘ノ傍ラ小規模ノ稼行ヲ為スニ於テハ假令少量ナリトハ云ヘ極メテ佳良ナル亜鉛鉱ヲ産出スルコトヲ得ヘシ」といった意見が出されている[48]。所詮，郷谷川左岸の金平金山域，すなわち不動山金山域では，大資本による鉱業近代化は進展しなかった。1908(明治41)年度



第11図　旧加賀金平村六橋の現集落（小松市金野町）

（2,500分の１「小松市都市計画図」）

①旧石黒家屋敷跡　　④宮谷の渓口（旧「金山町」はこの付近と想定）

②現在の山神社　　⑤この辺りが「道頓堀」

③稲荷堂　　⑥この北西方の小丘上に江戸期山神を勧請

には産金額8,887匁，鉱夫数424を数えたとはいえ，当時，松田助松外2名を鉱業権者とした村民共有鉱山として，鉱区北西近くに金野鉱山事務所[49]を有し，多くの自稼人による零細な稼行形態を展開していたに過ぎなかった。

なお金平村領には前述の字不動山などを中心とした金平金山以外に，字赤芽などで18世紀後半以降石黒家が開発した金平村領銅山があり，幕末には当銅山も藩の御手前山となった。金沢藩は金平銅山などの近代化を意図し，1871(明治4)年ドイツ人のデッケン(E. von Decken 1837～1897)を招聘するも，廃藩置県にともなう鉱山学所(兼六園)の廃止などですぐ解雇を余儀なくされた[50]。明治期の銅山開発は，この金平銅山などよりも，後述する遊泉寺・尾小屋の両銅山が脚光を浴びるに至った。

Ⅵ．小松・梯川水系の近代銅山と跡地風景

〈遊泉寺銅山〉 梯川支流の仏大寺川水系において，金平村領銅山とほぼ同時期の安永年間に，遊泉寺村領銅山が前述の十村役源次と埴田村の十村役半助を介して採掘され始めたと伝える。1872(明治5)年に至り，金沢の士族坪内金吾が，金平銅山とともに遊泉寺銅山の稼行を出願し開発に乗り出した[51]。しかし坪内金吾自身，1878(明治11)年に北海道に移住し，まず銅山開発は頓挫した。遊泉寺銅山の本格的な開発は，佐賀県で芳谷炭坑を経営していた旧土佐藩士竹内綱が，1902(明治35)年に当銅山地を買収してからである。1904(明治37)年下半期から操業を開始し，1908(明治41)年当時，鉱業権者「芳谷炭坑株式会社」が経営する当銅山は，鉱業権者「横山隆俊」の尾小屋鉱山とともに，県下鉱山の双璧をなすまでに急激な台頭をみせた。ちなみに「芳谷炭坑株式会社」は，今日の佐賀県東松浦郡北波多村において，1885(明治18)年に竹内綱，外村宗次郎，高取伊好，竹内明太郎，魚澄総左衛門らの共同経営のもとに創設された「芳谷炭坑」が母体で，1894(明治27)年に株式会社となった[52]。芳谷炭坑の開発で活躍した中心人物こそ，竹内綱の長男であった竹内明太郎で，彼によって遊泉寺銅山も本格的な開発が進められた。なお，芳谷炭坑の上記共同経営者の中に外村宗次郎の名をみるが，実は1902(明治35)年に竹内綱が遊泉寺銅山に進出する以前に，すでに外村宗次郎が当銅山の採掘権を得ており，それが機縁で竹内綱がその取得に乗り出したものと思われる。

竹内明太郎らが遊泉寺銅山の開発に乗り出すや，まず能美郡里川村(明治40年国府村)の大字遊泉寺と大字仏大寺の字界地域，籠り谷付近に深さ720尺の竪坑を掘進することに着手した。さらに百馬力の蒸気捲揚機をはじめ諸設備の設置など進め，進出3年目の1904(明治37)年の下半期から出鉱をみるに至った[53]。上記の竪坑口から北西方向の金山流川渓谷に，製錬場，選鉱場，電気分銅所，事務所などが立ち並んだ。その下流に，1910(明治43)年測図の5万分の1「鶴来」図幅に「遊泉寺銅山通」と記載されている市街・住宅地が続いた(第10図)。このように遊泉寺銅山の鉱山集落が，小山神社が鎮座する遊泉寺本村から東方2キロ以上も隔たった山間奥地に忽然と形成され，上記地形図にみる「遊泉寺銅山鉄道」も1907(明治40)年に小松町まで布設された。鉱山街は，金山谷から発する大字遊泉寺の金山流川渓谷だけでなく，隣接する大字仏大寺の仏大寺川源流域，観音谷口付近から遣水谷口にかけても出現した。飯場や商店なども並

ぶ異質な鉱山社会が，かかる山間奥地に突如として展開され，明治末・大正初にはいち早い電気文化の到来で，外灯が夜空に映える珍しい光景が繰り広げられた[54]。1908(明治41)年当時，当鉱山の労働者数は880人を数えたが，1916(大正5)年ごろには銅山従業員も1,600人に達し，その家族も合わせて5,000人が住む鉱山町が形成されていたと伝える。前述の佐賀県芳谷炭坑は1911(明治44)年に三菱鉱業㈱が買収併合するところとなり，ここに竹内明太郎は竹内鉱業㈱の主力をこの遊泉寺銅山の経営に注いだが，第一次世界大戦後の銅価の下落と開発鉱脈の枯渇などから，1920(大正9)年には早くも閉山を余儀なくされた。当鉱山町の生命はわずか20年足らずでうたかたのように消え失せ，無人の荒涼とした跡地が山間に残された。

明治40年代には銅山の隆盛にともない地元民との間に各種の問題が発生した。まず洗鉱用など銅山用の溜池新設にともない下流の地元民耕地に水不足が生じ問題となり，さらに鉱毒水，煙害などの鉱害問題で下流，周辺の地元民との間に緊張関係を生んだ。鉱山側は補償や沈澱池整備などで地元民に対応したが，閉山後は荒廃跡地の問題などが残り，県当局も県有地として閉山直後の1922,23(大正11, 12)年に早速砂防工事など実施した。また終戦後も県の造林地としてアカシヤなどの植林が赤い山肌に試みられた[55]。旧鉱山集落一帯は，今日，植林されたスギなどの木立や夏の草木がうっそうと生え茂り，林間に残る煉瓦造りの小炉跡，製錬場跡の煙突・煙道などの遺構，さらに捨石や鉱滓などが散乱する光景などにわずかに出会う程度である(写真33～36)。その下流「遊泉寺銅山通」跡のスギ林を下り抜けると，その出口付近に，「遊泉寺銅山跡記念碑」が立つ公園がある(写真37)。この銅山跡記念碑は1991(平成3)年5月に建立されたが，その動機については，株式会社小松製作所の創立70周年を迎え，同社発祥の原点がこの遊泉寺銅山にあったことを後世に伝えるために記念碑を建立してほしいと，遊泉寺・鵜川・立明寺の地元小松市3町から要請があったことによると「由来」に記されている。この記念碑建立の賛同芳名録には㈱小松製作所社長を筆頭に，小松市長，小松商工会議所会頭，小松鉄工協同組合理事長，さらに多くの企業名が並んでいる。ちなみに，「遊泉寺銅山跡記念碑」の文字は，㈱小松製作所社長片田哲也氏の書によるが，この記念碑と並んで竹内明太郎の銅像が1996(平成8)年5月に建てられているのがとくに注目された。なお，この記念公園の一角に「遊泉寺銅山跡案内図」(写真39)がみられ，銅山盛時の鉱山街の様相を示しているのは興味深い。

実は遊泉寺銅山閉山翌年の1921(大正10)年に，竹内明太郎は銅山付設鉄工所であった小松鉄工所を竹内鉱業㈱から分離独立させ，株式会社小松製作所を創立した。機械工業に熱意を示す竹内明太郎は，佐賀県芳谷炭坑の付設鉄工所として，1909(明治42)年に唐津鉄工所の操業を開始していたが，芳谷炭坑の三菱鉱業への前記譲渡を経て，1916(大正5)年には株式会社唐津鉄工所をすでに創立していた。芳谷炭坑も1933(昭和8)年に閉山し，1996(平成8)年9月踏査当時はその遺構として北波多村大字岸山字堂目木の個人所有庭先に，「芳谷炭坑第三坑跡」の赤レンガ壁の坑口がわずかに残っている程度であった(写真38)。しかし，㈱唐津鉄工所は，今日も唐津港に近い唐津市二夕子地区に君臨し，新規機械の開発に努めている。その後の㈱小松製作所

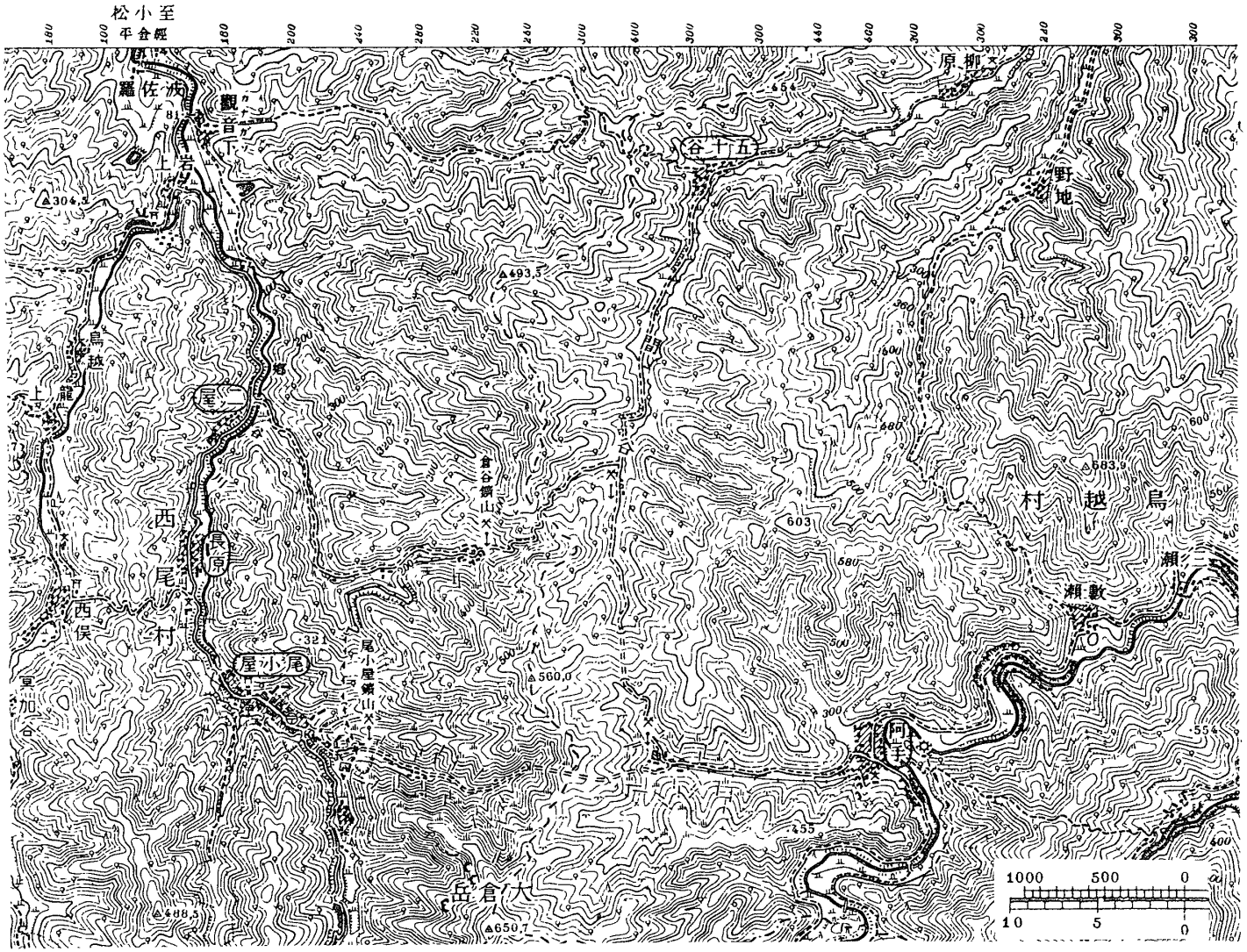
については多言するまでもない。遊泉寺銅山と㈱小松製作所の構図は，芳谷炭坑と㈱唐津鉄工所のそれと一致し，閉山と発展のコントラストな風景を展開してきた。

〈尾小屋銅山〉 金平から梯川支流の郷谷川を遡ると，その上流域にかつて石川県下最大を誇った尾小屋銅山の跡地がある。加賀藩領能美郡尾小屋村は，1670(寛文10)年村御印草高が363石で，幕領境の山間村落であった。大倉岳(650.7m)北西山麓の近世尾小屋村は，尾小屋(上村)，長原(中村)，二ツ屋(下村)の3つの集落から構成されていた(第12図)。3集落とも産土神の白山社がそれぞれ鎮座し，中村の長原白山社がもっとも古いと伝えるが，上村の尾小屋が本村的な位置を占めていた。

今日も製錬所の煙突が残る尾小屋の岩底谷で，18世紀後半の安永年間には，前記十村役の石黒源次らによって銅山が開かれ，南蛮吹もみられていたと伝える[56]。しかし，当銅山の本格的な開発は，1881(明治14)年に，旧加賀藩八家の横山家が横山隆平名儀のもとに鉱業権を一括買収し，隆宝館尾小屋鉱山として経営に乗り出してからである。とくに1904(明治37)年には横山本家隆平と同分家隆興の両家共同のもとに，「横山鉱業部」が創設され，明治40年代以降の当銅山の本格的な発展が導かれた[57]。1909(明治42)年には横山隆平の長男隆俊が相続し鉱業権者となっているが，鉱夫数も1908年には1,143人と，1,000人を越すまでに至っている。なお，採鉱地域も製錬所奥の岩底谷にまず本鋪坑口があり，その上部高所の富鉱脈に太田坑口が開かれ，さらにその背後の作事楯(560m)東側の鉱脈群に対し第一竪坑が開鑿されるなど北東方に拡大していった[58]。

〈阿手鉱山〉 尾小屋銅山の鉱区周辺には，明治後期，阿手・五十谷・倉谷などの諸鉱山が隣接していた(第12図)。能美郡別宮村(現石川郡鳥越村)の阿手と五十谷は，手取川支流の大日川水系にあり，能美郡西尾村(現小松市)の尾小屋や倉谷とは水系を異にした。阿手鉱山は平家伝説をも有する奥地のネイティブな阿手集落から西方へ約1.5km，大倉岳北東麓の金山谷入口付近にあった。当鉱山は1888(明治21)年より能登出身者が稼行をはじめ，その後組織された真宝館鉱山株式会社によって，明治30年代前半に向け急激な発展が推し進められた[59]。とくに1899(明治32)年には阿手地内を流れる大日川に水力発電所を竣工させ，電力利用などで製銅の急増をもたらしたが，従業員も一時は700人を数えるまでに至ったと伝える。しかし，狭い鉱区の上に，隣接する尾小屋銅山によって拡大も阻まれ，明治30年代後半には漸次経営難に陥ったが，1908(明治41)年度には従業員数も160人に減少していた。結局，1911(明治44)年には，鉱区，水力発電所，建物などが尾小屋鉱山に売却され，事実上，阿手の真宝館鉱山の名は消滅した[60]。後に選鉱場や製錬場も尾小屋に移され，わずかに鉱夫飯場などを残すだけとなったが，阿手での採鉱も1931(昭和6)年で終わり，文字通り阿手の鉱山集落は姿を消した。この鉱山跡地には製錬の鍰(からみ)などが散乱し，樹木の乏しい笹などの植生景観を付近に繰り広げてきたが，この一帯に戦後の1970(昭和45)年に鳥越村の村営大日スキー場が設けられ，新たな風景が登場した[61]。

〈五十谷鉱山〉 五十谷鉱山は阿手と同一行政村に属し，同じ大日川水系にあったが，谷を異にした堂川上流の間谷に所在した(第12図)。当鉱山はネイティブな五十谷集落の南2km余，阿手鉱山の北方約1.7kmの場所にあり，



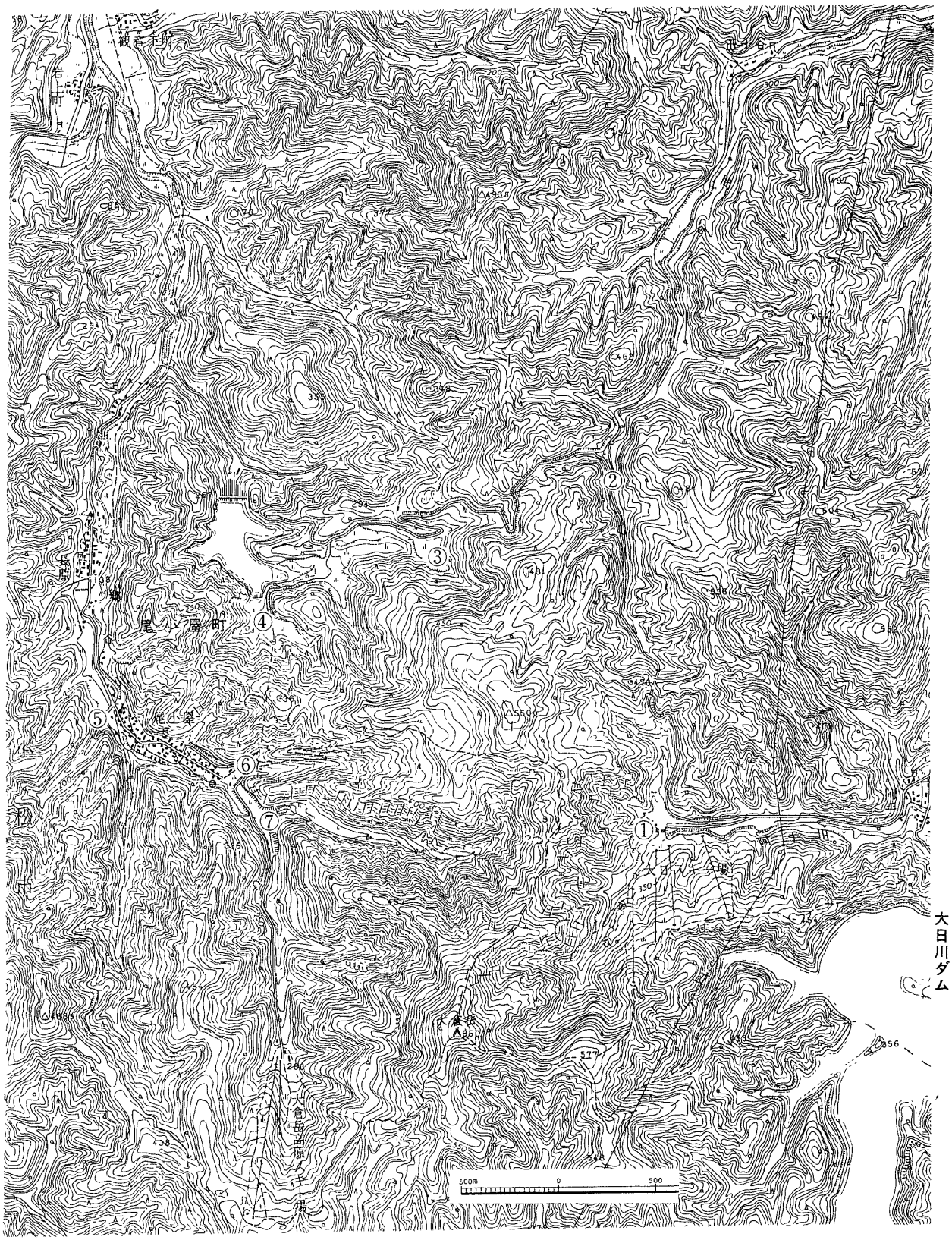
第12図　1910(明治43)年測図の加賀尾小屋鉱山付近地形図

(陸地測量部５万分の１「白峰」図幅，1913年製版)

そして後述する南西の倉谷鉱山に通ずる道の分岐点近くに位置した。明治20年代以降，金沢の人や五十谷の地元民などによって細々と稼行され，従業員も数十人までの良宝館と称する銅山で，飯場や製錬場などがあったと伝える。この鉱区は早くも1905(明治38)年には隣接する尾小屋鉱山に買収され，五十谷鉱山の名は消滅するに至った。旧坑口や鍛捨場の石垣などかつての鉱山の遺構が1972(昭和47)年ごろ確認されている[62]。

〈尾小屋鉱山倉谷地区〉 明治期，尾小屋鉱山の北東部，五十谷鉱山の南西部にそれぞれ隣接して倉谷鉱山があった(第12図)。倉谷の谷間には，郷谷川の一支谷上流にあり，尾小屋同様に明治行政村の西尾村域で，大字波佐羅の飛地をなしていた。明治10年代以降零細な鉱山経営者が相次いで登場したが，1913(大正2)年に横山鉱業部が倉谷鉱区を一括買収するに至り，尾小屋鉱山の一部となった。翌1914(大正3)年には，後に本山採鉱の中軸となる第六竪坑の開鑿が始まるなど，倉谷地区が尾小屋鉱山の主体となる態勢が漸次整えられていった。1920(大正9)年から労働争議が相次ぎ，経営状況も悪化して，尾小屋鉱山はついに1931(昭和6)年12月，日本鉱業株式会社の手に渡った[63]。1962(昭和37)年閉山までの日鉱時代を通じ，倉谷地区は尾小屋銅山の採鉱・選鉱などの拠点であった。1956(昭和31)年小松市編入に際し，「倉谷町」として独立した「町立」がなされた[64]。閉山前の1960(昭和35)年当時，倉谷地区の集落はおもに倉谷・小曲・大曲などの集落からなり，第六竪坑に近い倉谷集落が中核をなしていた。倉谷集落には採鉱課，選鉱場などの鉱山事業諸施設や，医局分院，供給所，社宅などの福利厚生諸施設が分布した。背後高所には38棟ばかりの倉谷社宅のほかに，1927(昭和2)年設置の倉谷分校や鉱山祭で賑った山神社があった。この山神社は本来，波佐羅の本村と同じ八幡神社であったが，当神社の祭礼を尾小屋の山神社と同日に鉱山祭として催すようになり，文字通り倉谷の山神社になった。この倉谷集落は1955(昭和30)年当時人口560を数えたが，その下流に大規模な沈澱池があった。その近くに小曲・大曲の社宅集落が分布していた。倉谷集落に近い小曲集落には15棟ばかりの社宅と，それに近接して工作課諸施設がみられた。大曲集落は，尾小屋側の阿手坂社宅付近と結ぶ第三トンネル入口に立地し，14棟ばかりの社宅からなっていたが，その東側には廃石などで造成された運動場も存在していた。このように倉谷地区は，横山鉱業部や日本鉱業㈱の資本によって形成された，フォーリンなマイニング・セッツルメントの典型例であった。それだけに1962(昭和37)年の閉山を契機に集落は急速に壊滅し，無人の荒廃跡地と大きな沈澱池(写真40)を残すだけとなり，ネイティブな集落を有する尾小屋地区とは異なった廃墟の風景を繰り広げた。

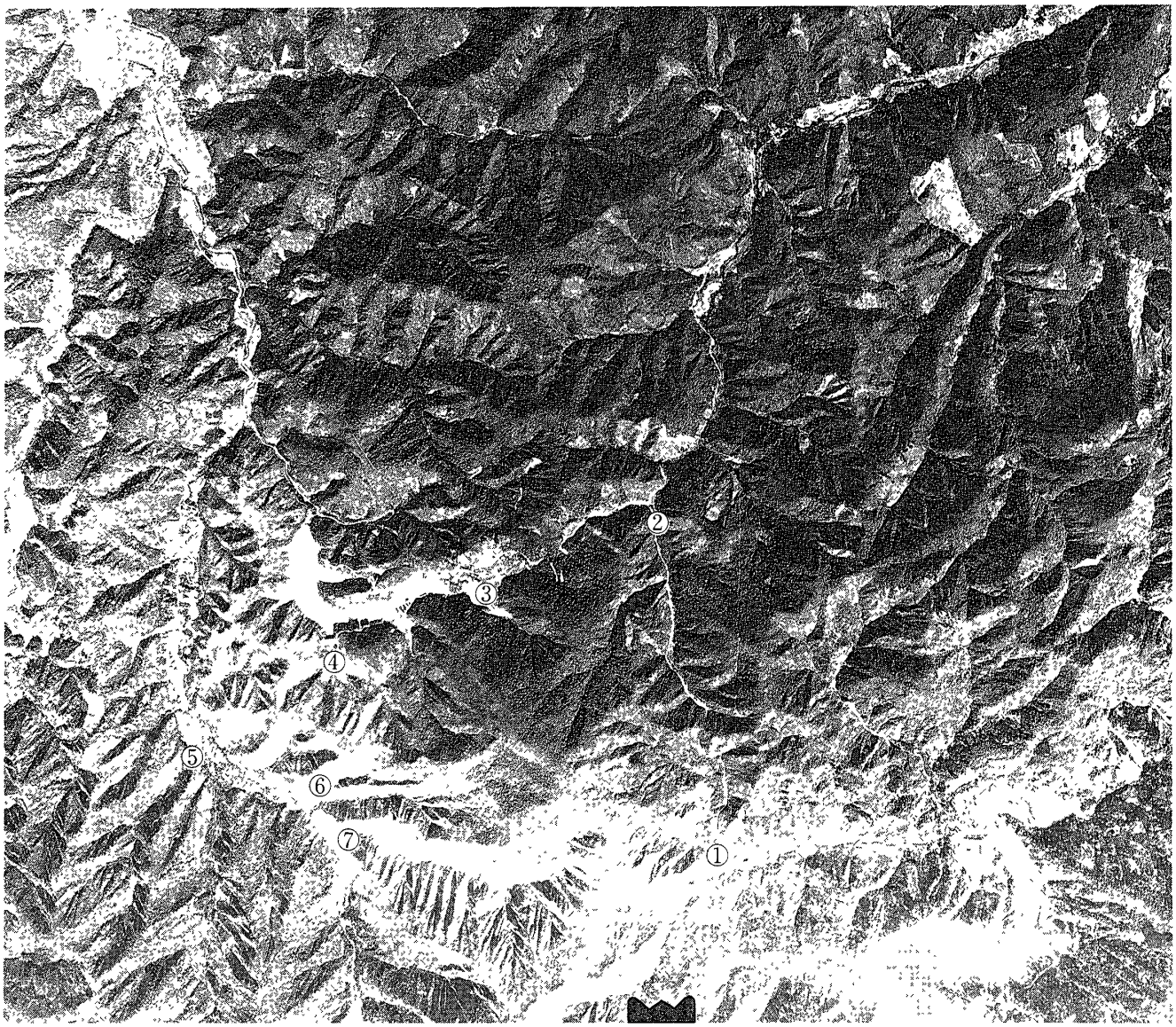
1996(平成8)年7月末の照りつける暑い日に，現尾小屋鉱山資料館長で，かつて倉谷分校の教師をしていた道端清氏の案内で，この倉谷地区の廃墟の跡を歩いてみた。広大な沈澱池上流の河谷には，選鉱場跡付近の捨石場などが白い肌をみせ(写真41)，その近くの第六竪坑跡を探し求めると，夏の草木の中に閉ざされたその坑口だけがやっと見出された(写真42)。緑で覆われた付近背後の斜面には，なんとなく倉谷社宅の屋敷跡の面影が漂っているような風景がみられた(写真43)。大曲集落跡付近では前述の第三トンネル入口のコンクリート施設の遺構が認められ(写真44)，か



第13図　1980(昭和55)年修正測量の旧尾小屋鉱山周辺地形図

(国土地理院2.5万分の1「尾小屋」図幅)

①阿手鉱山跡辺り　②五十谷鉱山跡辺り　③第六竪坑・採鉱課・選鉱場・倉谷社宅などの跡地辺り
④大曲社宅跡・第三トンネル入口（至阿手坂）辺り，北方に沈澱池
⑤尾小屋鉄道駅跡辺り　⑥尾小屋鉱山資料館・尾小屋マインロード（旧阿手坂社宅付近）
⑦岩底谷入口・製錬所跡辺り



第14図　閉山(1962)後6年目の旧尾小屋鉱山付近の空中写真

（国土地理院ＣＢ－68－8Ｙ，Ｃ5Ａ－9，1968年）

空中写真中の番号は第13図（地形図）中の番号と同じ，ほぼ同一場所に比定。

つてこのトンネルを通って尾小屋側の本校に通学していた子供たちの思い出など道端氏は語ってくれた。大曲社宅跡は面影すら消えていたが(写真45)，かつて鉱山祭などで賑わった，その近くの運動場跡は，捨石などで平垣にした場所で草木は余りみられず，人影ない空間を谷間にひっそりと残していた。沈澱池に近い崩れた捨石場には，尾小屋側の製錬所方面から運んできたと思われる，後述の「亀の甲カラミ煉瓦」などが散乱している光景がみられ驚いた(写真46)。鉱山の大きな爪痕の沈澱池は，自然の湖水のように静かに白く光っていたが，その下の鉱水点検処理施設(写真47)は郷谷川下流の鉱害防止のために，閉山後もその機能継続が義務づけられてきた。

〈尾小屋鉱山尾小屋地区〉 白山神社がそれぞれ鎮座した尾小屋・長原のネイティブな集落域にもフォーリンな鉱山企業諸施設が立地していた。尾小屋集落域には製錬所・事務所・病院・会館・供給所・沈澱池，さらに阿手坂と社前の両社宅や山神社など，鉱山関係のフォーリンな要素が多く加わり，また鉱山に直結して一般商業機能が街村的家並みを形成していた。さらに長原集落域には，鉱山役宅を含む社宅が計20棟ばかりあり，珪肺病関係の鉱山療養所もみられた。閉山2年前の1960(昭和35)年当時，尾小屋集落域には193の世帯数と788の人口数がみられたが，尾小屋鉄道廃止翌年の1975(昭和50)年には世帯数77，人口215に減少している。また，長原集落域も1960(昭和35)年の世帯数47，人口数222が，1975(昭和50)年には世帯数27，人口99と減少をみた。かかる閉山による人口減は，フォーリンな集落要素の撤去をもたらし，部分的に廃墟空間を現出した。1985(昭和60)年には，尾小屋が49世帯と50台を割り，長原も同年には18世帯と20台を割っているが，倉谷地区諸集落のように無人とならず集落の存続をみている[65]。それは小松などとの道路整備が進み，マイカー通勤や観光開発も可能なだけに，ネイティブな集落コミュニティの主体性が維持され易かったことによるであろう。とくに行政サイドから観光開発などの新機軸が地域振興のために打ち出され，新しい「場所イメージ」の創出努力がみられたことも注目される。「鉱山があった山にミズバショウとコスモスが咲く」といったキャッチフレーズのもとに大倉岳ハイキングコースが紹介され，また周辺には冬のスキー客で賑わう大倉岳高原スキー場や鳥越高原大日スキー場なども開設された。その大倉岳北西麓の拠点尾小屋には，全国でも珍しい「県立」の尾小屋鉱山資料館が，1984(昭和59)年に阿手坂入口の旧社宅付近に設けられた(写真48)。さらにその側には付設の「尾小屋マインロード」の観光施設も，1988(昭和63)年以降鉱山トンネルを利用して整備拡充が進められた(写真49)。今日は約30分のマグシーバー解説付きで，坑内のファンタジーな世界に観光客を案内している。かかる資料館や観光施設は，ここだけに人を呼ぶためのものでなく，広域的な見学・観光ルートの中に織り込むことが今後の検討課題になるであろう。

山神社は閉山で姿を消したが，土産神の白山神社には道路側に立派な石造鳥居が整備され(写真50)，古い大きな民家には「小松市文化交流サロン　いろり塾」の看板をみる。バス停近くの川上旅館土蔵壁面が，黒色四角の「カラミ煉瓦」でできている光景にはまず驚いた(写真51)。六角形の「亀の甲カラミ煉瓦」が一般で，それらが集落随所で石垣がわりにみごとに積み上げられているのはまさに圧巻で，当

集落特有の風景である(写真52)。日立市本山の日鉱記念館構内でも，「尾小屋鉱山銅製錬鍰(からみ)」として，この「亀の甲カラミ煉瓦」が並べられている風景に出会った。旧尾小屋鉄道駅構内(写真53)には，小型蒸気機関車などが愛好家たちによって買収保存されており，それを動かすことに取り組む人たちも見た。尾小屋集落入口に架かる橋の名が「横山橋」となっているのが目に入ったが，これはかの鉱山経営者・横山家の姓をとったものであろう。商店のある家並みの上部にある鉱山事務所跡付近にはテニスコートもできているが(写真54･55)，ここから製錬所のあった岩底谷入口付近まで歩いた。岩底谷界隈の山腹は，10年近く前に観察した折に比べて緑化は今日かなり進んでおり，低い煙突が茂る草木の上にわずかに頭を出していた。同じ日鉱経営の佐賀関や日立大雄院の大煙突のことを思い出し，尾根より低い山腹までの尾小屋の小煙突風景にあらためて煙害を再認識した。閉山まで日本独特の真吹炉などによる山元製錬がみられていただけに鉱煙による植生破壊が徹底的に進み，中腹以下は全く土壌がなく，緑色凝灰岩などの基岩が露出する光景が繰り広げられた(写真56)。ダイナマイトによる岩盤植栽，ヘリコプターによる播種など20年間に及ぶ緑化事業で，今日は岩底谷を中心に一応緑の回復をみるまでに至っている(写真57)。

あとがき

1996(平成8)年3月末，春雨降る上野の杜に出かけ，国立科学博物館で開催中の「日本の鉱山文化　絵図が語る墓らしと技術」の特別企画展を見学した。これに展示された越中・加賀関係の鉱山絵図は，本稿でも言及した石川県指定文化財の「金平金山之図」と，「石川県加賀国能美郡尾小屋村　銅山坑区・銅山外面地図　坑主横山隆平」だけであった。日本鉱業史研究会の人たちと一緒に見学したが，この会場で，今夏の日本鉱業史研究会の現地見学会と研究発表会を石川県の尾小屋で開きたいと，理事の吉田国夫氏を通じ熱心な申し出があった。吉田氏の熱意と尽力で，1996(平成8)年8月上旬猛暑の日に，遊泉寺・尾小屋の両鉱山跡地見学会と，尾小屋鉱山資料館レクチャー室での研究発表会が催された。当鉱業史研究会の会員には技術畑関係の達人が多いが，上記研究発表会でも，例えば日鉱技術畑で活躍され学殖豊かな安田正之氏による「明治期の尾小屋の製錬」と題した貴重な発表もあった。

本稿は当初，「越中七かね山」について少しでも集中的に書き留めたいと念じながら，上記の尾小屋研究会などが入り，関心が加賀のフィールドにも飛び，結局あちこちの皮相な記述を重ねるだけのものとなった。やはり分析と総合を欠く反省を繰り返す結果となったが，次から次に鉱山跡地を追うロマンが頭の中で錯綜して仕方がなかった。例えば，前記上野の特別企画展で目のあたりにした，「尾去沢銅山絵図」は，たしかに筆者が大学院生(博)の1958(昭和33)年晩秋，陸中鹿角を訪れ，尾去沢銅山地・田郡の川口義弥家で閲覧したものであった。坑道をつたい歩いて訪ねた川口家に泊めていただき，家人の親切な協力で資料収集をした昔日を思い浮かべ，消滅した田郡の集落跡地はどうなっているであろうかと思いを馳せた。豪州の遠隔地集落，合衆国西部のゴースト・タウンなど，フィールドの夢はただ世界を駆け巡る[66]。

各地でお世話になった方々に対し，あらためて深甚なる謝意を捧げたい。

注

1）川﨑　茂（1994）.「鉱山跡地の風景論」『金沢大学文学部論集　史学科篇』13・14号（合併号），pp 1～48.

川﨑　茂（1996）：「続鉱山跡地の風景論」『金沢大学文学部論集　史学科篇』16号，pp. 1～43.

2）川﨑　茂（1958）：「鉱山集落における共同体的構成とその形成過程―飛騨国神岡鉱山の調査から―」『地方史研究』8巻1号，pp. 20～29.

川﨑　茂（1973）.『日本の鉱山集落』大明堂，pp 154～172所収。

3）川﨑　茂（1960）.「飛騨神岡鉱山の近代化と地域の対応」『人文地理』12巻1号，pp. 50～76.

2）川﨑前掲書（1973），pp. 341～371所収。

4）富山県郷土史会（1958）.『越中鉱山雑誌』（富山県郷土史会叢書第三），122 p.

5）4）前掲書，pp. 1～14.

6）小葉田　淳（1951）：『長棟鉱山史の研究』（神岡町葛谷利春氏編・発行），206 p.

7）小葉田　淳（1953）.「亀谷銀山」『文化史学』7号，pp. 16～34.

小葉田　淳（1968）：『日本鉱山史の研究』岩波書店，pp. 368～393所収。

8）小葉田　淳（1955）.「松倉金山」『越中史壇』6号，pp 1～7.

7）小葉田前掲書（1968）pp 357～368所収。

9）広田寿三郎（1958）：「鉱山村の盛衰―松倉金山の場合―」『越中史壇』13号（特集：富山県の産業史研究），pp. 1～5.

10）7）小葉田前掲書（1968），p. 361.

11）富山県下新川郡役所（1909）『下新川郡史稿　下巻』，p. 114.

12）9）前掲広田論文，p. 4.

13）森本繁幸（1986）.「神社の地理学的研究―魚津市を中心として―」『黒部川扇状地』11号，p. 82.

14）魚津市史編纂委員会（1968）.『魚津市史　上巻』魚津市役所，p. 222.

15）7）小葉田前掲書（1968），p. 364，　14）前掲『魚津市史』，p. 222.

16）元禄12（1699）年2月　河原波金山，山師居屋敷拝領願書「乍恐御断申上候」〔魚津市史編纂委員会（1982）.『魚津市史史料編』，pp. 463～465所収〕

17）13）前掲森本論文，p. 85.

18）4）前掲『越中鉱山雑誌』，p. 37所収史料。

19）7）小葉田前掲書（1968），pp. 352～353.

20）明治35年8月15日『坑夫取立面状　富山県下新川郡松倉村字河原波　神山鉱山」（金山徳右衛門所蔵）広田寿三郎氏からコピー借覧。

21）7）小葉田前掲書（1968），p. 348.

22）11）前掲『下新川郡史稿　下巻』，p. 113.

23）14）前掲『魚津市史　上巻』，p. 225.

24）上市町誌編纂委員会（1970）：『上市町誌』上市町，p. 364.

25）26）　延宝8年11月「就御尋申上候」4）前掲『越中鉱山雑誌』，pp. 78～79所収史料。

27）三井金属鉱業株式会社修史委員会編（1970）：『神岡鉱山史』三井金属鉱業株式会社，pp. 639～643.

28）「角川日本地名大辞典」編纂委員会（1979）：『角川地名大辞典　16　富山県』角川書店，p. 606.

29）6）小葉田前掲書の「後序」として，葛谷利春氏の記（1951）がある。

30）27）前掲『神岡鉱山史』，pp. 310～311掲載の天保3年「長棟村領絵図」。

31）4）前掲『越中鉱山雑誌』，p. 64.

32）大山町史編纂委員会（1964）『大山町史』大山町役場，pp. 963～964所収史料。

33）27）前掲『神岡鉱山史』，pp. 628～629.

34）27）前掲『神岡鉱山史』，pp. 679～685所収資料。

35）32）前掲『大山町史』，p. 965.

36）大山町亀谷にある大山町歴史民俗資料館所蔵。「亀谷銀山」コーナーに展示。

37）32）前掲『大山町史』，pp. 932～933，p. 965.

38）小葉田　淳（1986）：『続日本鉱山史の研究』岩波書店，pp. 451～457.

39）大沢野町誌編纂委員会（1958）『大沢野町誌　上巻』大沢野町役場，pp. 545～547.

40）東京鉱山監督署（1911）：『日本鉱業誌』所収第5諸表，第1表。

41）38）小葉田前掲書（1986），pp. 413～427.

堀田成雄（1968）.「宝達金山に関する史料研究」『北陸史学』16号，pp. 39～52.

42）38）小葉田前掲書（1986），pp. 563～571.

43）1891（明治24）～1893（明治26）年の「加賀国倉谷鉱山記事及報告書」

〔日本鉱業史料集刊行委員会（1987）『井戸弘義上申書等・加賀倉谷鉱山記事』（第八期明治篇下）白亜書房，pp. 45～75所収〕

農商務省鉱山局（1897）『鉱山発達史』，pp

320～324.
44) 財団法人石川郡自治協会(1927)：『石川県石川郡誌』，pp. 1059～1082.
45) 38)小葉田前掲書(1986)，pp. 1～28.
46) 石川県能美郡役所 (1923)：『石川県能美郡誌』，pp. 1157～1190.
47) 38)小葉田前掲書 (1986)，p. 14.
48) 農商務省鉱山局 (1912)：『亜鉛鉱鉱床調査報文第一回』，pp. 35～40.
49) 金野の郷土史編集委員会 (1975)：『金野乃郷土史』，p. 467.
50) 46)前掲『石川県能美郡誌』(1923)，p. 1166.
51) 38)小葉田前掲書 (1986)，pp. 20～23.
52) 北波多郷土誌刊行会 (1943)：『北波多郷土誌』，pp. 140～141.
山﨑猛夫 (1991)：『北波多の文化財』北波多村教育委員会，p. 22.
53) 40)前掲『日本鉱業誌』(1911)，pp. 445～453.
54) 辰口町史編纂専門委員会(1985)：『辰口町史　第五巻集落編』辰口町役場，pp. 924～925.
55) 国府村史編纂委員会 (1956)：『国府村史』国府村役場，pp. 334～336.
56) 38)小葉田前掲書 (1986)，p. 20.
57) 橋本哲哉 (1986)：『近代石川県地域の研究』金沢大学経済学部，pp. 179～205.
橋本哲哉(1978)：「明治大正期の尾小屋鉱山」『三井金属修史論叢』10号，pp. 417～438.
58) 43)前掲『鉱山発達史』(1897)，pp. 277～287.
40)前掲『日本鉱業誌』(1911)，pp. 434～444.
59) 43)前掲『鉱山発達史』(1897)，pp. 293～299.
60) 46)前掲『石川県能美郡誌』(1923)，pp. 1105～1106.
61)62) 鳥越村史編纂委員会 (1972)：『石川県鳥越村史』鳥越村役場，pp. 663～667.
63) 川　良雄編 (1958)：『西尾村史』小松市役所西尾出張所，pp. 198～236.
64) 63)前掲『西尾村史』(1958)，pp. 536～552.
65) 及川尚紀(1994)：「石川県尾小屋における鉱山閉山直前の集落景観」金沢大学文学部卒業論文（未刊)，所収図表参照。
66) 川﨑　茂 (1992)：『鉱山業フロンティアの諸相―環太平洋地域論―』大明堂，284 p.

［追記］

本稿印刷中，富山県全域の廃村を取り上げた次の書物が刊行されているのを知った。この中に，松倉・河原波・下田・長棟など，「かね山」ゆかりの廃村に関する貴重な記載がみられる。

山村調査グループ編 (1995)：『村の記憶』桂書房，311p.

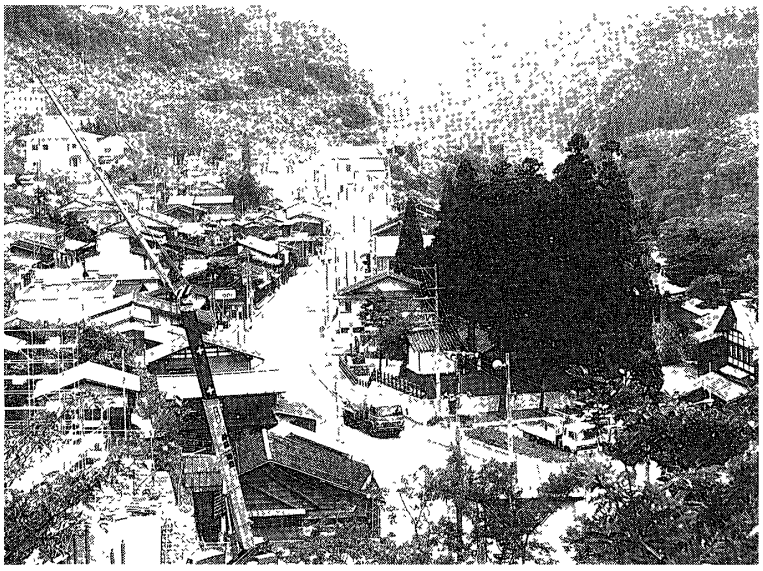


写真１．飛騨東茂住（神岡町）の集落，国道41号線，右の森付近に神明神社と金龍寺，手前左の工事中は東大宇宙素粒子研究施設（筆者1996．８）

写真２．角川山間奥地の廃村古鹿熊付近の水田跡地（筆者1996．８）

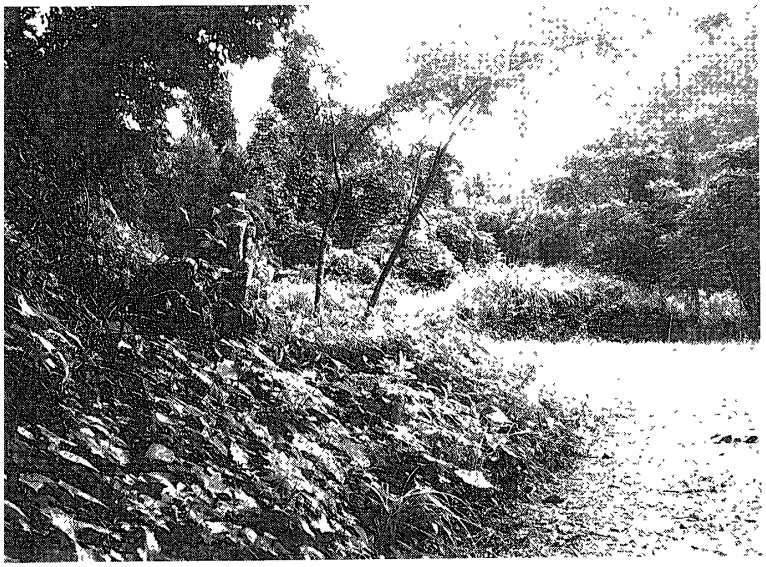


写真３．松倉・河原波の旧「かね山」入口，古鹿熊廃村路傍の地蔵尊（筆者1996．８）

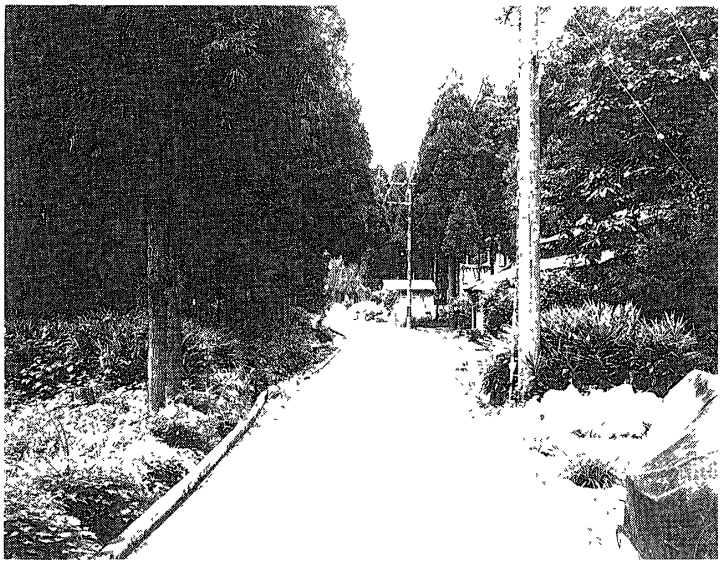


写真４．魚津市虎谷の集落内部（筆者1996．８）

写真５．小早月川河岸の魚津市虎谷の集落入口付近（筆者1996．８）

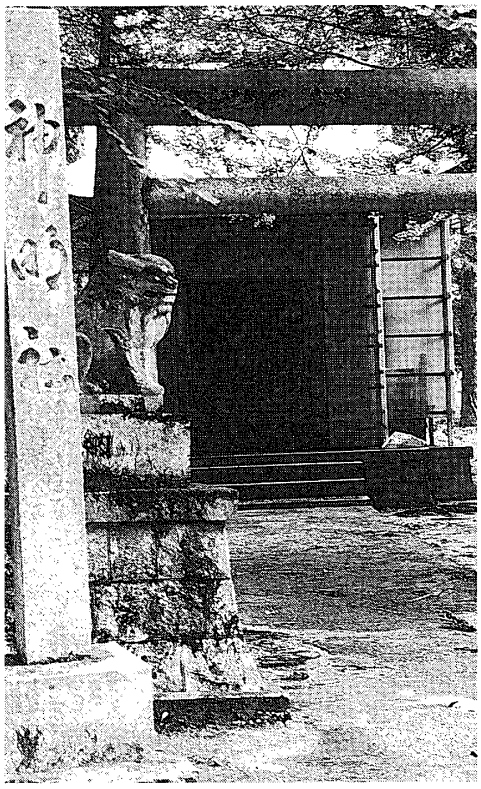


写真６．魚津市虎谷の神明社
（筆者1996．８）

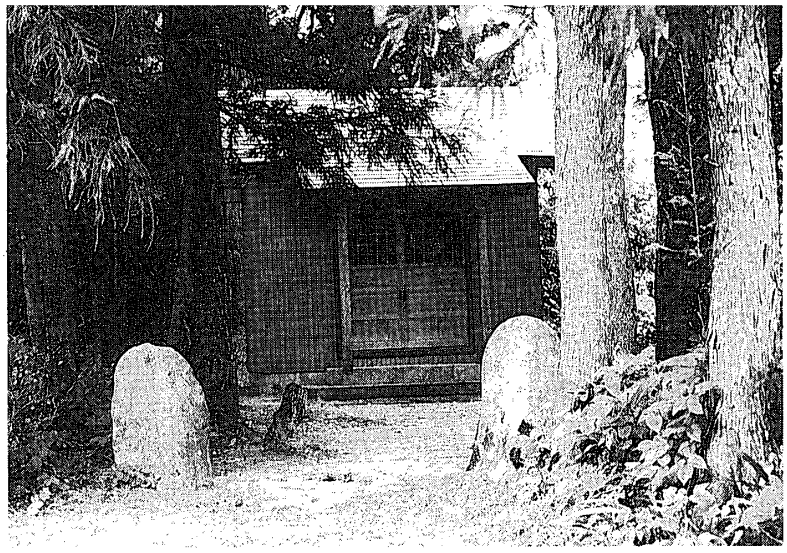


写真７．魚津市虎谷の八幡社（筆者1996．８）

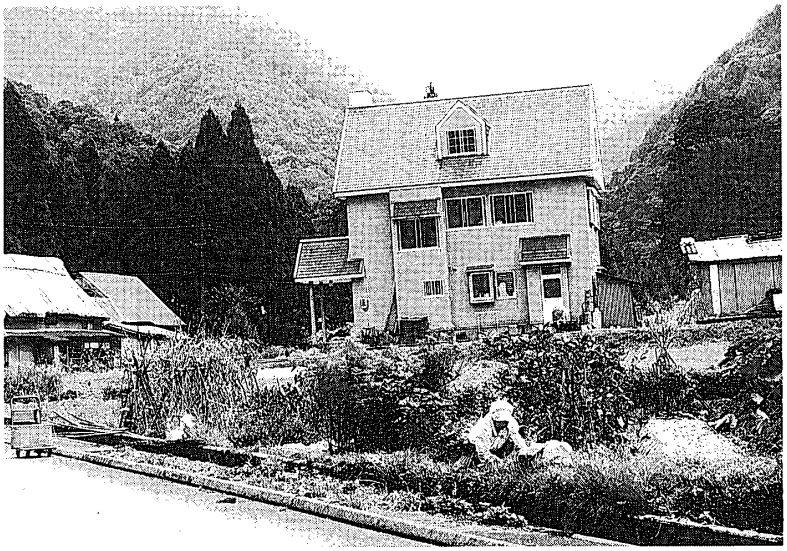
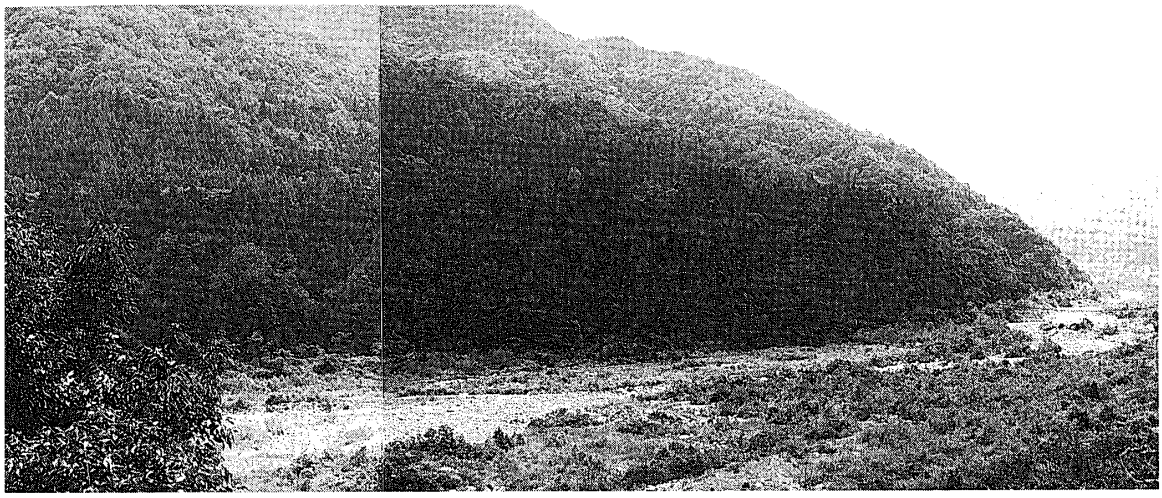


写真８．魚津市虎谷に
みる新築の山
本豊一家邸宅
（筆者1996．８）

写真９．早月川右岸の上市町下田の段丘上廃村跡スギ
林，右端につり橋（筆者1996．８）



←つり
橋

写真10.
上市町下田の廃村
跡地（水田・屋敷
跡）とスギ林
（筆者1996．８）

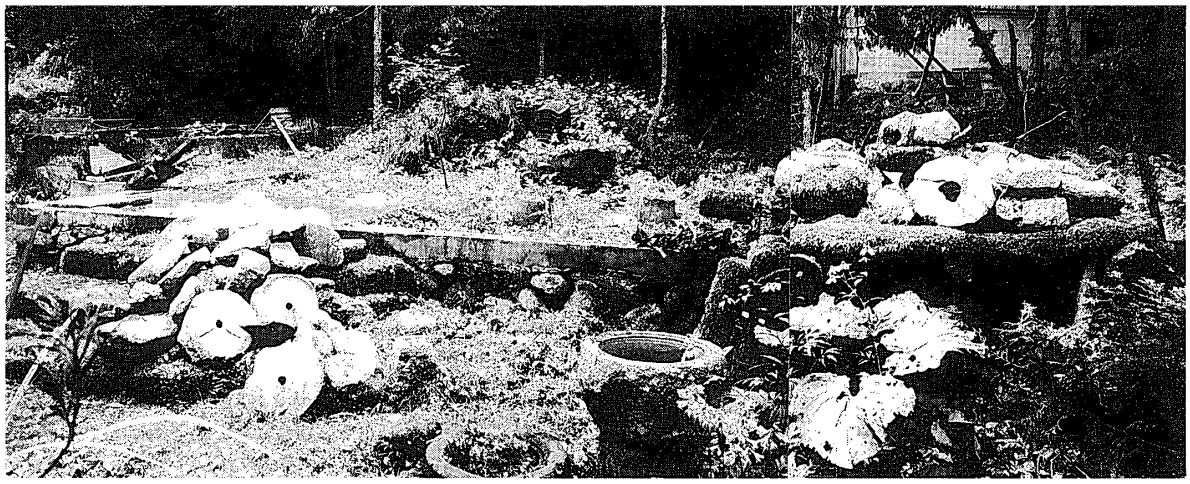


写真11. 上市町下田の廃村屋敷跡に散乱する石造生活用具（筆者1996. 8）

写真12. 上市町荒田に移された廃村下田の八幡社（筆者1996. 8）

写真13. 大山町小見の集落，左に和田川，右端に亀谷登り道，手前に北陸電力小見発電所（筆者1996. 8）

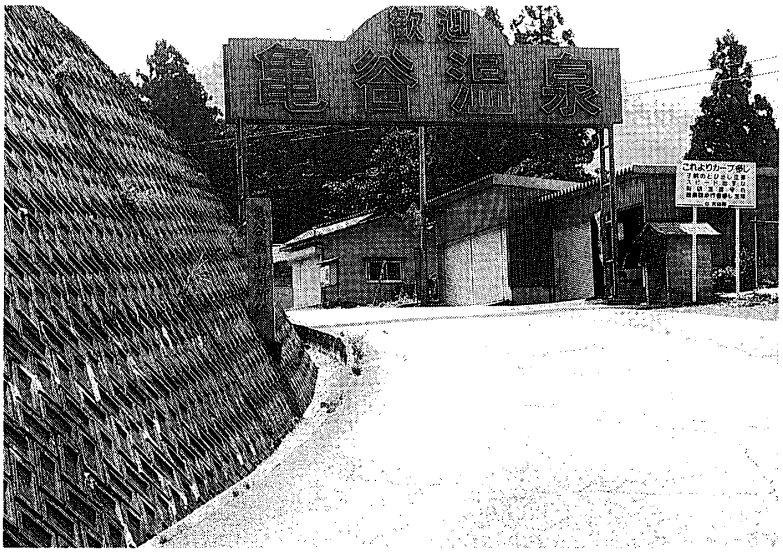


写真14. 大山町亀谷の集落入口，左に「亀谷鑛山関所跡」標柱(筆者1996. 8）

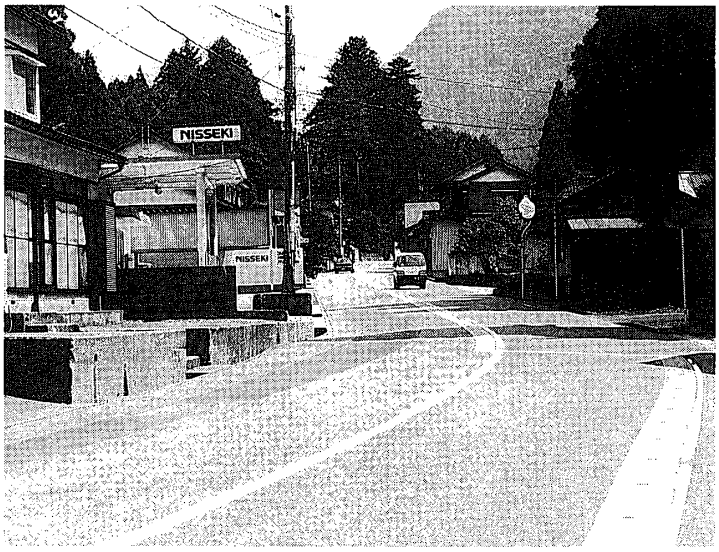


写真15. 大山町亀谷の集落，右側に西法寺，前方左の森が神明社（筆者1996. 8）

写真16. 大山町亀谷の神明社
（筆者1996. 8）

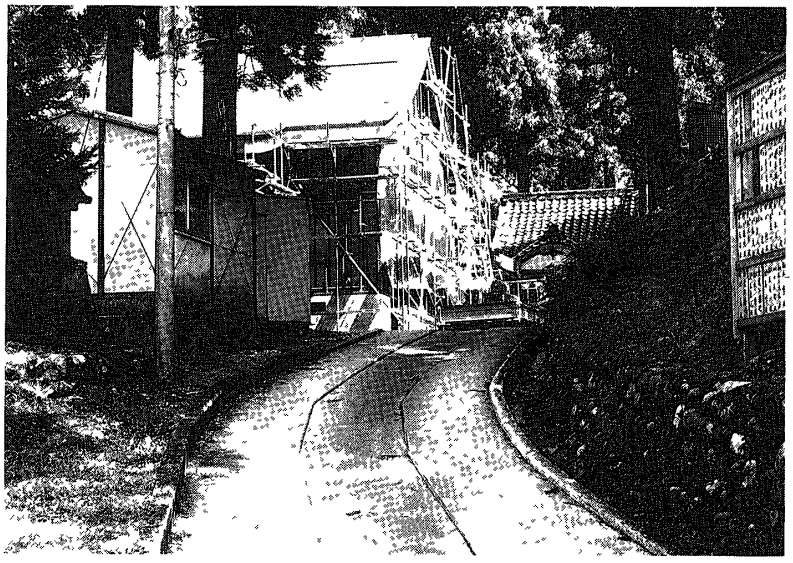


写真17. 大山町亀谷の金昌寺，右に「本堂再建寄付者芳名」
奥に宗貞公位牌堂（筆者1996. 8）

写真18. 大山町亀谷金昌寺境内の宗貞公位牌堂，右に「茂
住宗貞翁之碑」（筆者1996. 8）

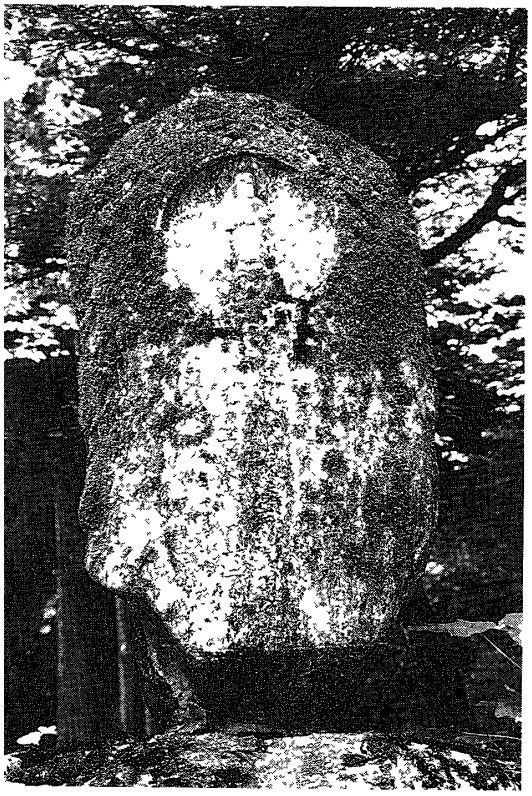


写真19. 大山町亀谷金昌寺境内の「茂住
宗貞翁之碑」（筆者1996. 8）

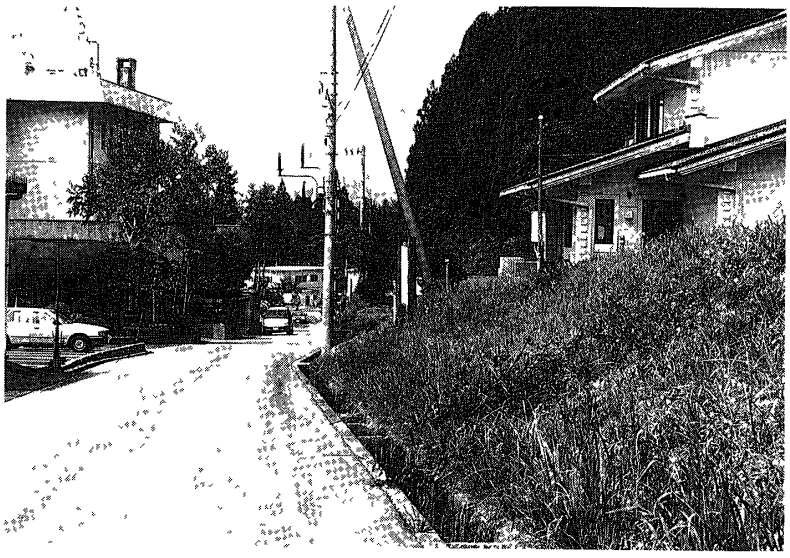


写真20. 大山町亀谷の大山町歴史民俗資料館（右）と国民
宿舎白樺ハイツ（左），左手前に湯元貴水館続く
（筆者1996. 8）

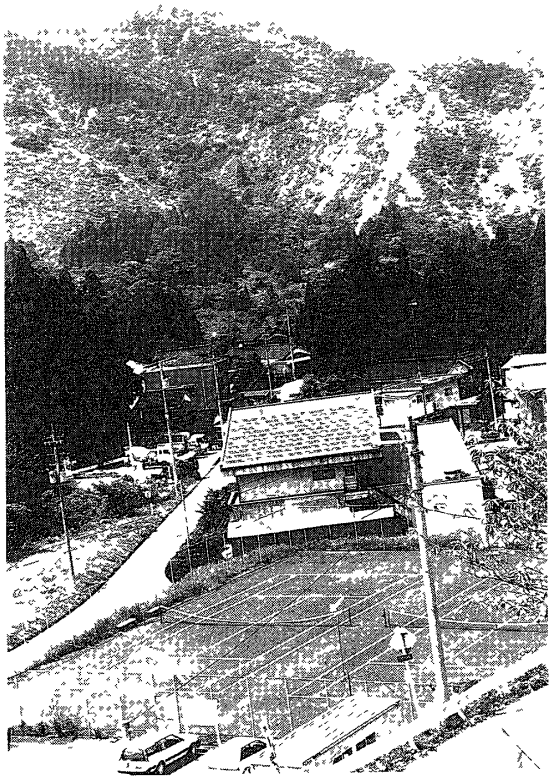


写真21. 大山町亀谷のテニスコート周辺，前方右の神明社の森近くに「選鉱場跡」，左手前に「吉原坂」（筆者1996. 8）

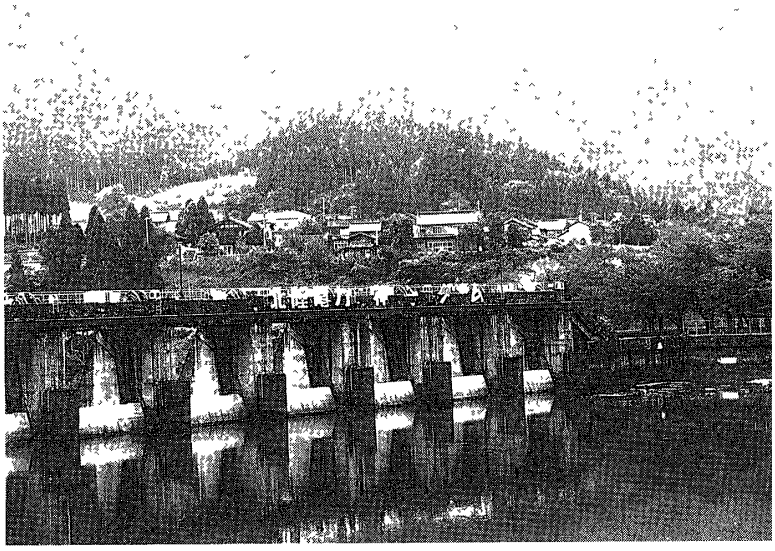


写真22. 大沢野町吉野の集落と神一タム（筆者1996. 8）

写真23. 大沢野町吉野の集落に上る坂道付近，スキ林の坂道端に銀山跡標柱（筆者1996. 8）

写真24. 大沢野町吉野の「吉野銀山坑道跡」標柱，写真23の坂道端，背後に神一タム（筆者1996. 8）

25. 右方に小松市金野町（六橋）の集落，右端奥の森が八幡神社，左方は金平本村（筆者1996.10）

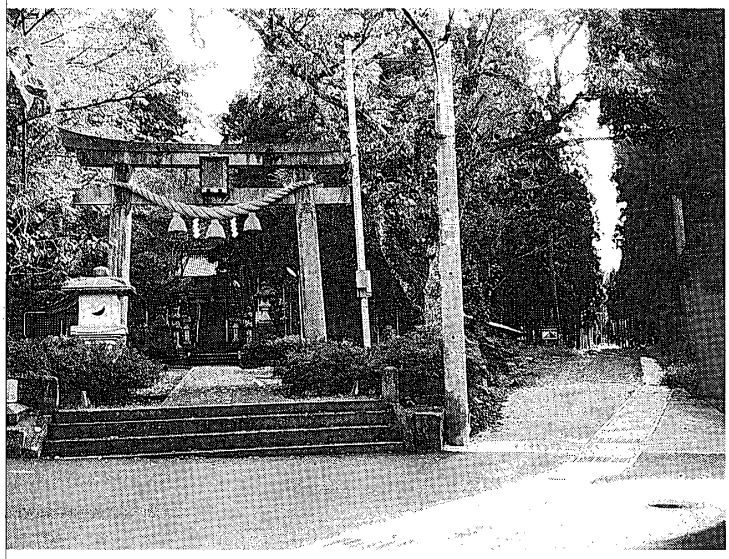


写真26. 金野（六橋）の八幡神社，右方に宮谷（筆者1996.10）

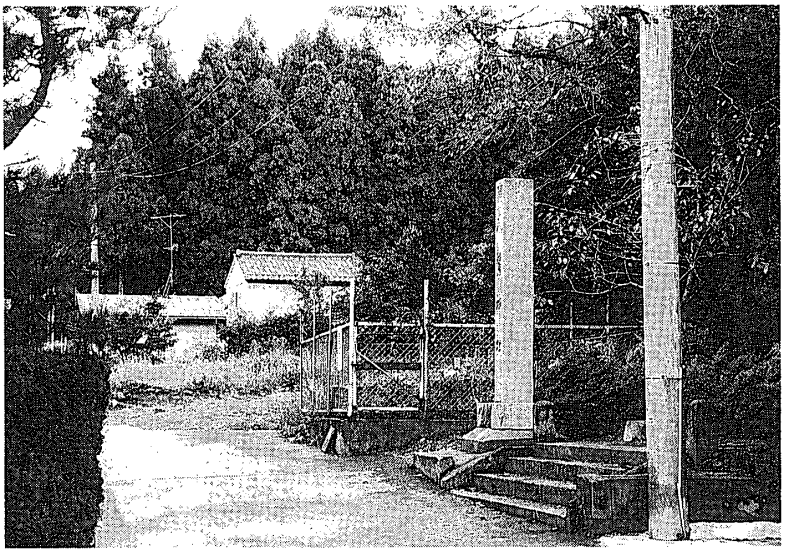


写真27. 金野（六橋）の八幡神社参道口東側（左側）に旧石黒家屋敷跡（筆者1996.10）

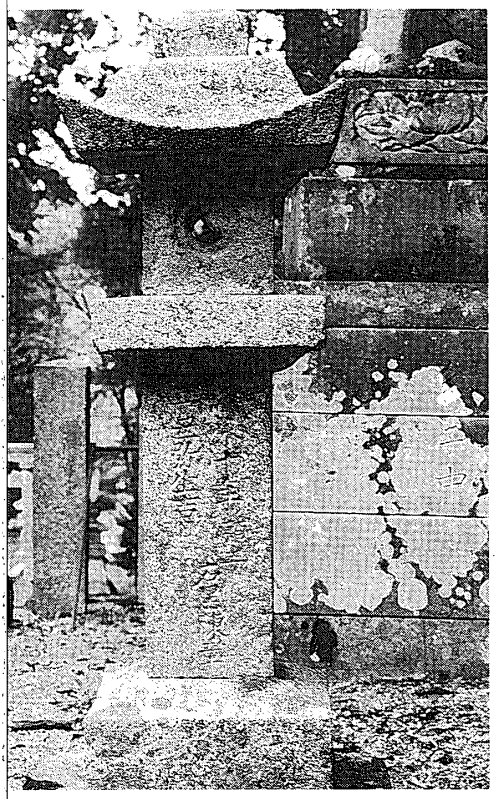


写真28. 金野（六橋）八幡神社拝殿前の石灯籠，安永10年願主石黒家の銘（筆者1996.10）

写真29. 金野（六橋）八幡神社境内の山神社（筆者1996.10）

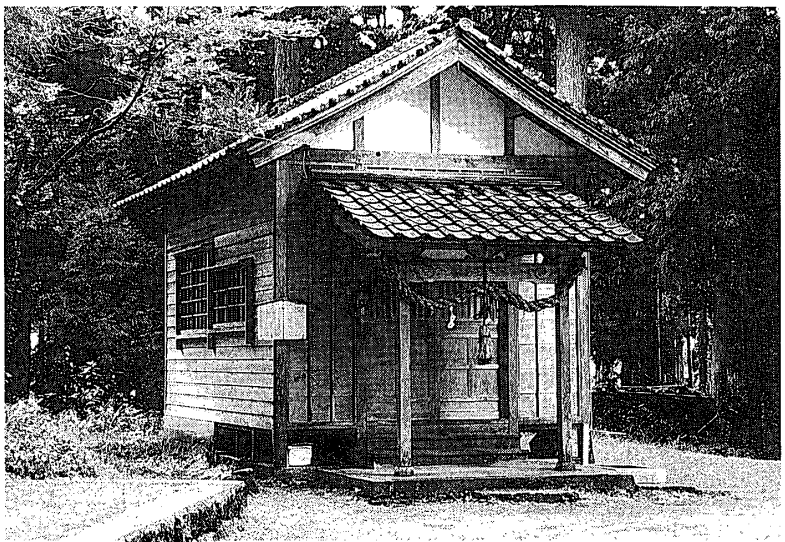


写真30. 金野（六橋）八幡神社境内の稲荷堂（筆者1996.10）

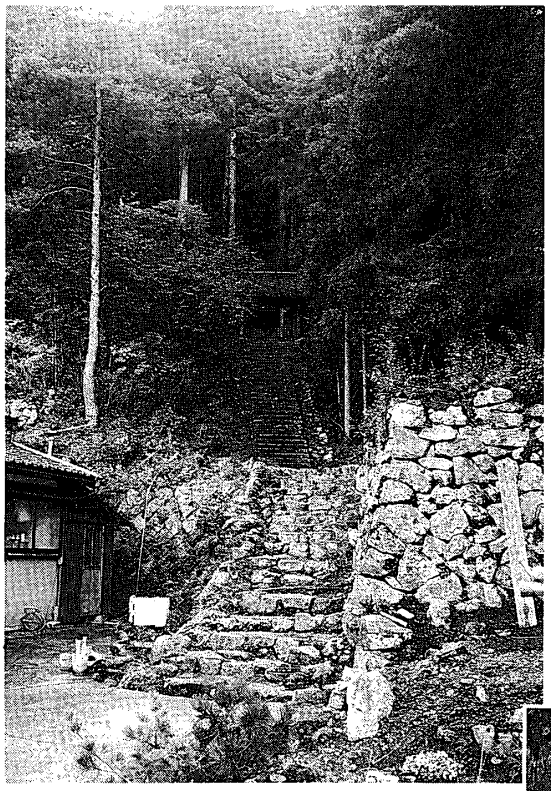


写真31. 小松市金平町不動集落の不動尊堂宇石段（筆者1996. 10）

写真32. 小松市金平町出村白山神社参道から旧鉱山地の不動山麓荒廃地を望む（筆者1996. 10）

写真33.「遊泉寺銅山通」の市街・住宅地跡のスギ林（筆者1996. 7）

写真34.「遊泉寺銅山通」跡スギ林の中に残る煉瓦造りの小炉（筆者1996. 8）

写真35. 遊泉寺銅山製錬所煙道遺構（筆者1996. 8）

写真36. 旧遊泉寺銅山製錬所奥に散乱する鉱滓など（筆者1996. 8）

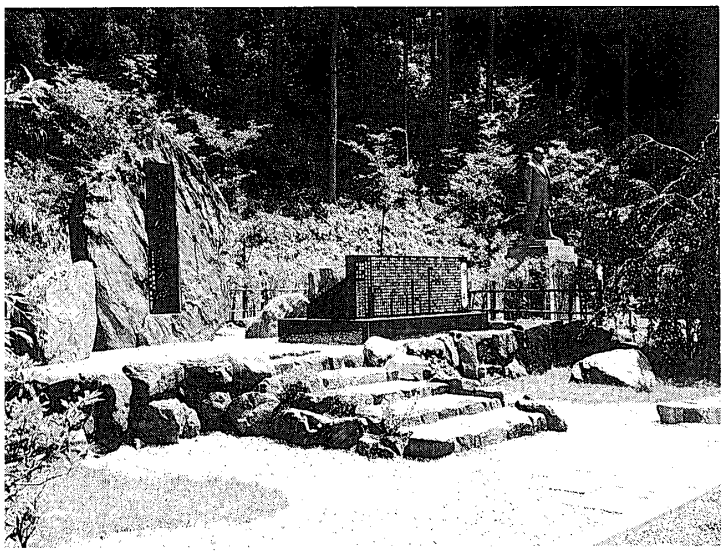


写真37. 遊泉寺銅山跡記念碑と竹内明太郎銅像
（筆者1996. 7）

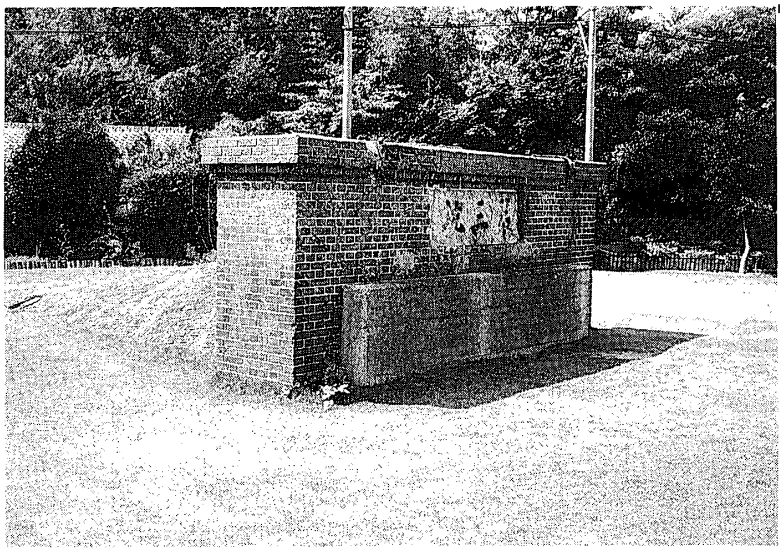


写真38. 佐賀県北波多村の「芳谷炭坑第三坑跡」
（筆者1996. 9）

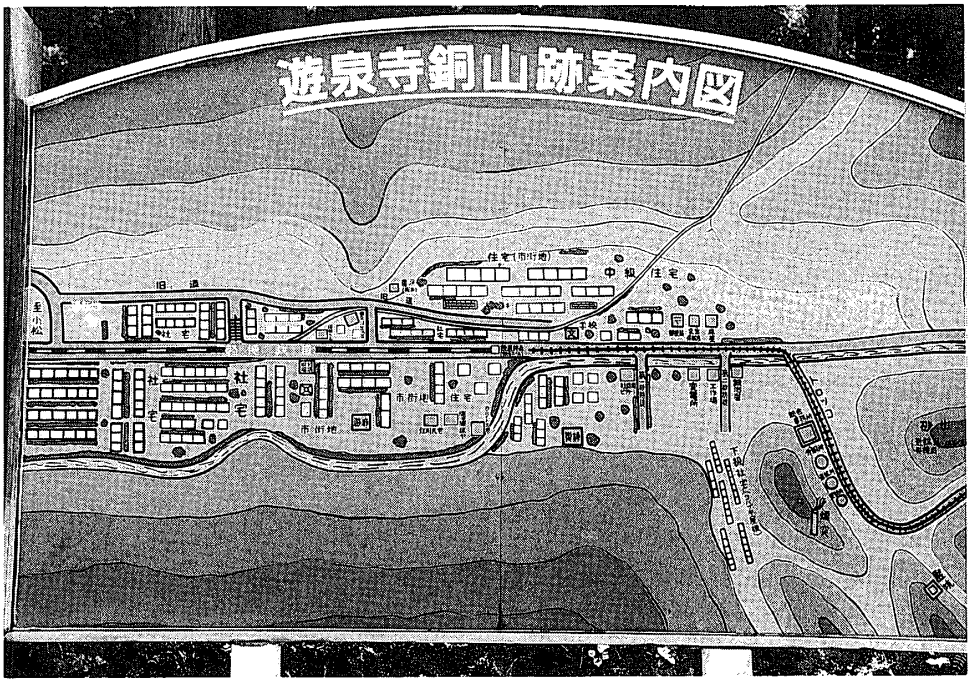


写真39. 遊泉寺銅山跡記念公園に立つ案内図（筆者1996. 7）

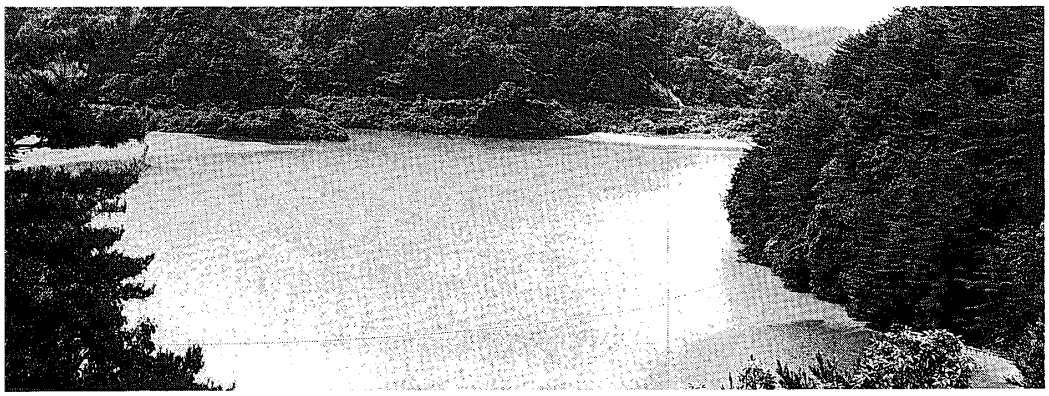


写真40. 旧尾小屋鉱山倉谷地区沈澱池
（筆者1996. 7）

写真41. 旧尾小屋鉱山倉谷地区の選鉱場跡，捨石場方面を望む
（筆者1996. 7）

写真42. 旧尾小屋鉱山倉谷の第六竪坑口跡
（筆者1996. 7）

写真43. 旧尾小屋鉱山倉谷社宅跡（筆者1996. 7）

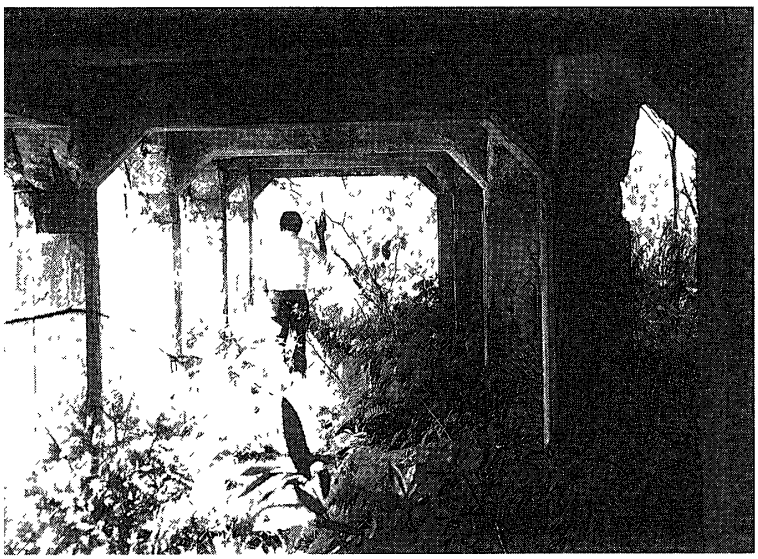


写真44. 旧尾小屋鉱山倉谷地区（大曲）の第三トンネル入口遺構（筆者1996. 7）

写真45. 旧尾小屋鉱山倉谷地区大曲社宅跡界隈
（筆者1996. 7）

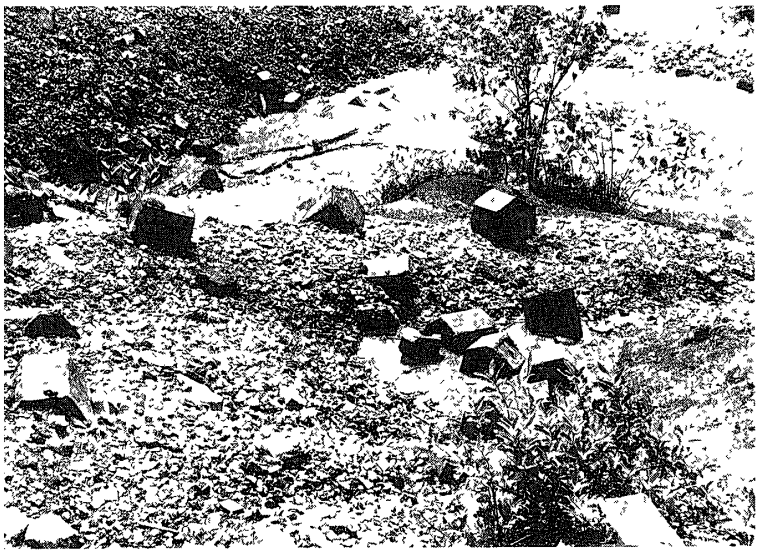


写真46. 旧尾小屋鉱山倉谷地区捨石場に散乱する「亀の甲カラミ煉瓦」（筆者1996. 7）

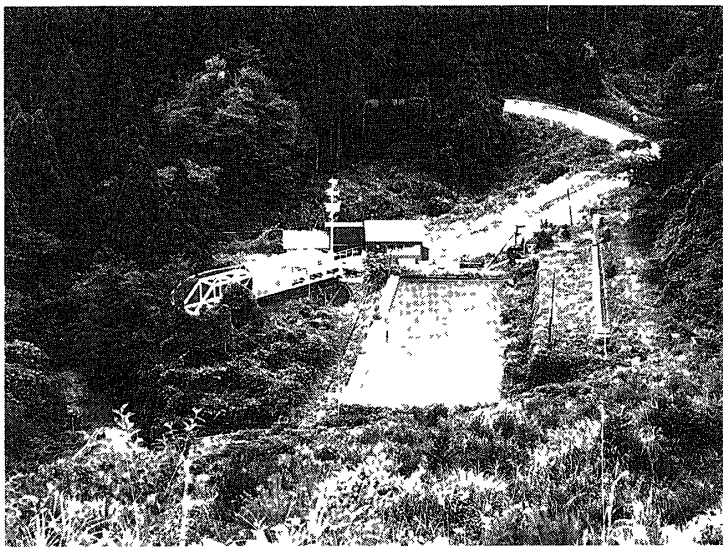


写真47. 旧尾小屋鉱山倉谷沈殿池下の鉱水点検処理施設
（筆者1996. 8）

写真48. 小松市尾小屋町阿手坂口の県立尾小屋鉱山資料館
（筆者1996. 7）

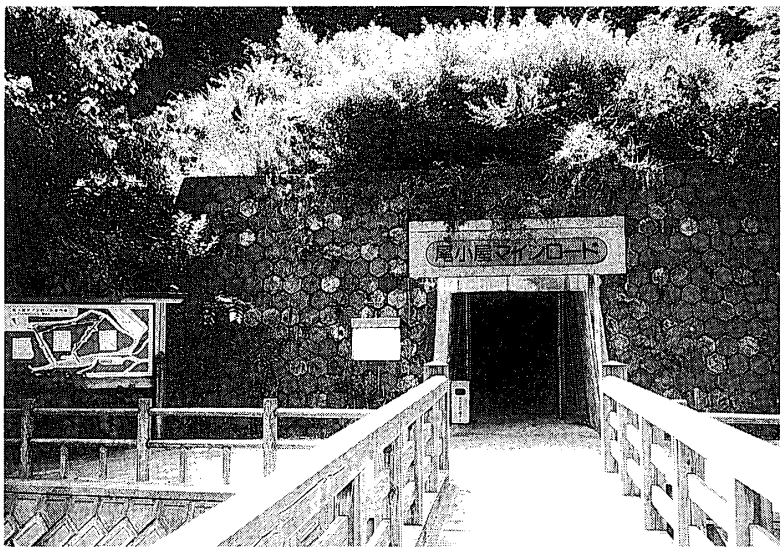


写真49. 鉱山資料館横の尾小屋マインロード入口と両壁の
カラミ煉瓦（筆者1996. 7）

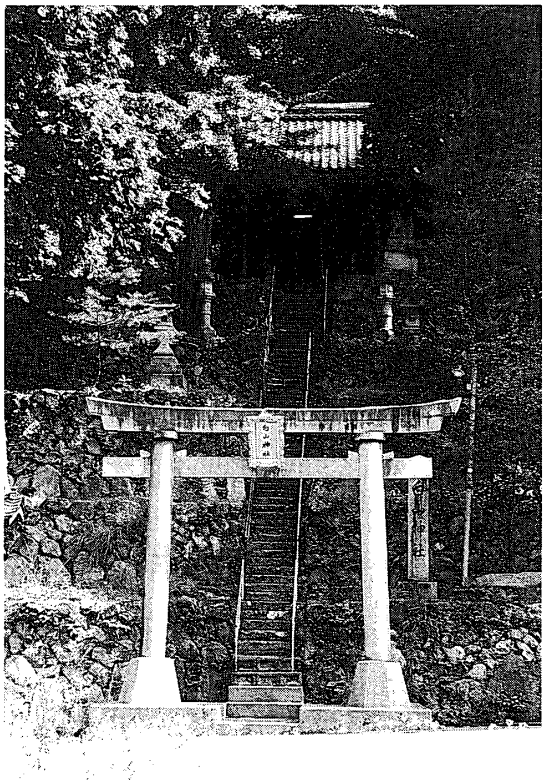


写真50. 尾小屋集落の白山神社
（筆者1996. 7）

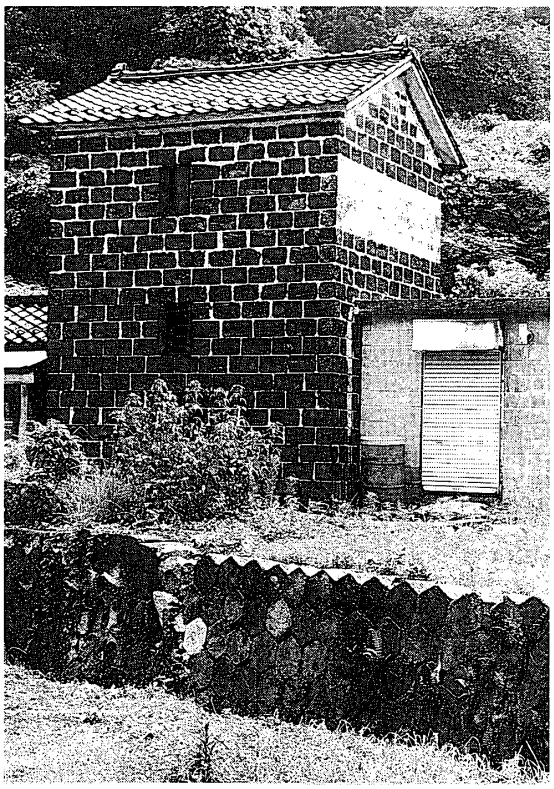


写真51. 尾小屋集落川上旅館の四角形カラ
ミ煉瓦土蔵壁，垣は亀の甲カラミ
煉瓦を積む（筆者1996. 8）

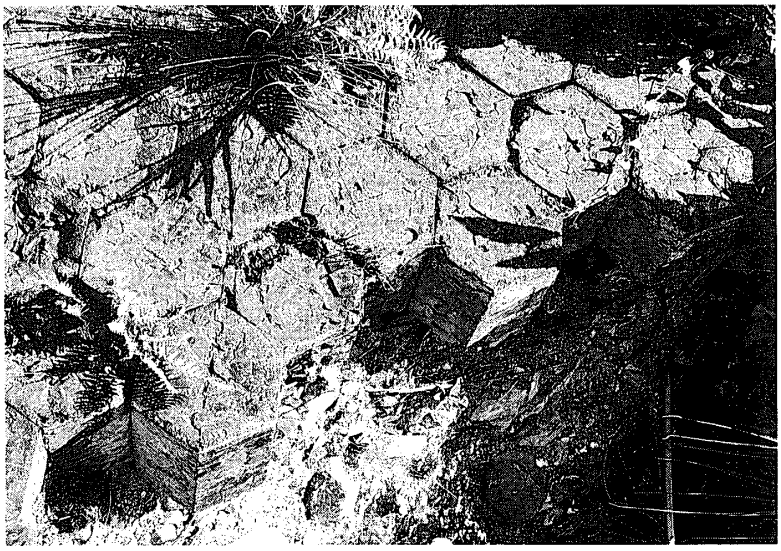


写真52. 尾小屋集落各所にみる「亀の甲カラミ煉瓦」
（筆者1996. 7）

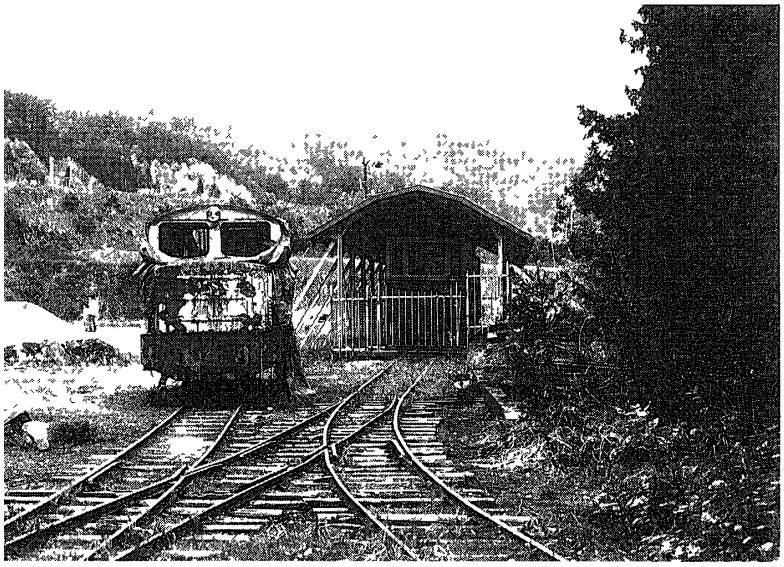


写真53. 旧尾小屋鉄道駅構内に残存の小型機関車等
（筆者1988. 5）

写真54. 尾小屋集落の旧鉱山事務所下の商店街
（筆者1996. 7）

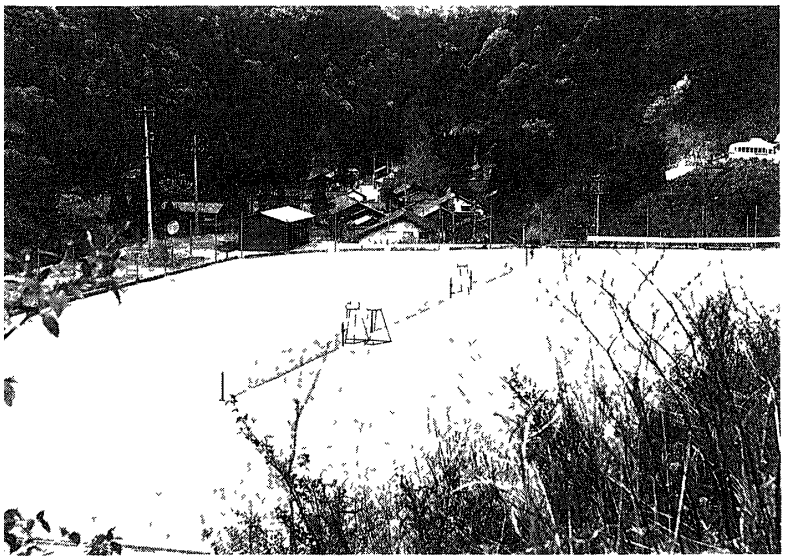


写真55. 旧鉱山事務所跡付近のテニスコート，下部に尾小屋の家並み（筆者1996. 5）

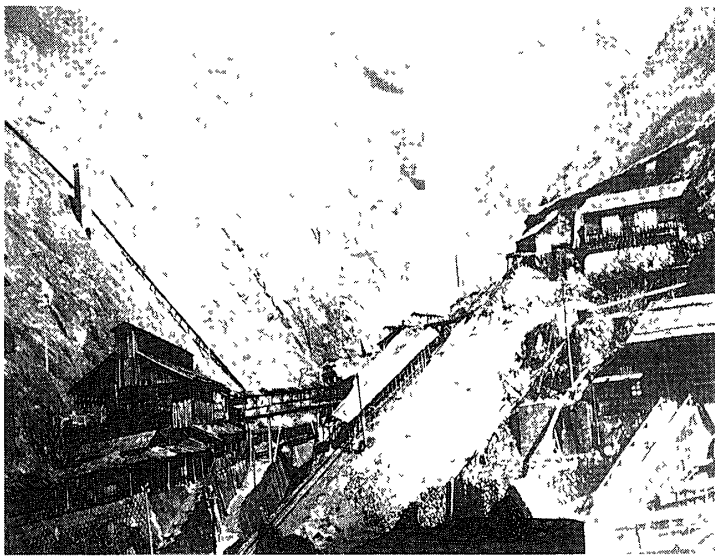


写真56. 尾小屋銅山盛時の岩底谷製錬場界隈（尾小屋鉱山資料館所蔵）

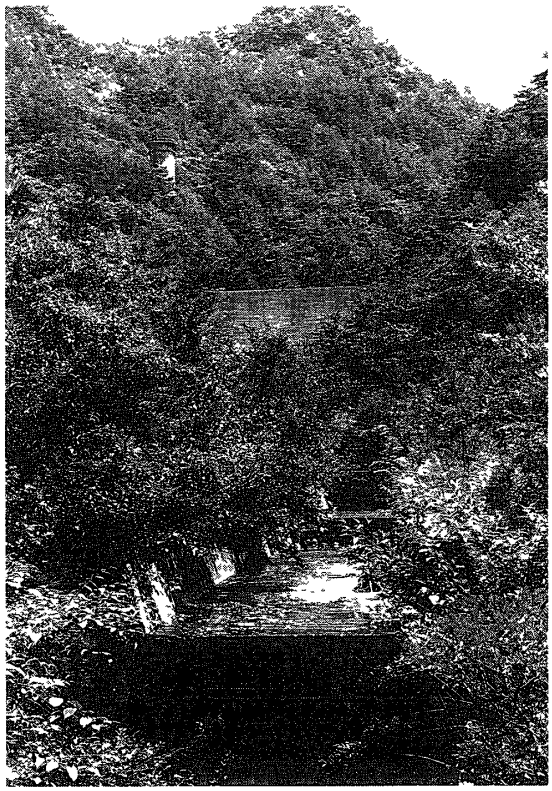


写真57. 緑化の進む旧尾小屋銅山岩底谷製錬場跡地界隈（写真56と対比）